



JACET通信

一般社団法人 大学英語教育学会

December 2015

The Japan Association of College English Teachers

No.195

目次

巻頭言（寺内一）	1	講演・シンポジウム	10
会員の皆様へ	6	第55回（2016年度）国際大会	19
会長退任の挨拶（神保尚武）	7	2015年度JACET賞	20
第54回（2015年度）国際大会		本部だより（上田倫史）	21
「大会を振り返って」（樋口晶彦）	8	特別寄稿（田中春美）	32
大会報告（馬場千秋）	9	特別寄稿（森越京子、吉田かよ子）	34
担当支部と会場校から（金岡正夫）	9	支部だより	36

[巻頭言]

新体制の紹介とアクションプランの具体的行動

一般社団法人大学英語教育学会会長 寺内 一
高千穂大学

平素より本学会の諸活動に対し、格別のご支援を賜り、誠にありがとうございます。2015年6月21日より一般社団法人大学英語教育学会（以下、JACET）の第8代の会長職を拝命いたしました寺内一でございます。前回の『JACET通信』194号でご挨拶いたしました。Web版でございましたので、紙面での挨拶は初めてとなります。任期中（2017年6月の社員総会まで）は一生懸命職務をまっとうする所存ですので、皆様のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

本稿では、まずはこの後に退任のご挨拶をなさっておられる神保尚武前会長をはじめとした6月21日にご退任なされた理事と監事の先生方と、新理事の氏名と役職をご紹介します。次に、『JACET通信』第194号でもお示した新会長と

してのアクションプランを改めてご説明いたします。最後に2015年度の学会としての事業ごとの活動状況を報告させていただきます。



1 新旧理事のご紹介

2015年6月21日をもってご退任された役員（理事・監事）は以下のとおりです。

神保尚武理事（代表理事・会長）、山内ひさ子理事（副会長）、河合靖理事（北海道支部長）、小嶋英夫理事（東北支部長）、大石晴美理事（中部

支部長)、中野美知子理事(関東支部選出)、木村博是理事(関西支部選出)、梅咲敦子理事(関西支部選出)、笹島茂理事(会長指名理事)の9名と見上晃監事1名です。先生方のこれまでのご尽力とご貢献に対してこの場を借りて御礼申し上げます。

2015年6月21日付けで就任したJACETの役員(理事・監事)は以下のとおりです。

寺内一理事(会長)、野口ジュディー津多江理事(副会長)、尾関直子理事(副会長)、横山吉樹理事(北海道支部長)、高橋潔理事(東北支部長)、木村松雄理事(関東支部長)、大森裕實理事(中部支部長)、小栗裕子理事(関西支部長)、松岡博信理事(中国・四国支部長)、樋口晶彦理事(九州・沖縄支部長)、内藤永(北海道支部選出)、富田かおる理事(東北支部選出)、佐野富士子理事(関東支部選出)、鈴木達也理事(中部支部選出)、田地野彰理事(関西支部選出)、岩井千秋理事(中国・四国支部選出)、志水俊広理事(九州・沖縄支部選出)、浅川和也理事(会長指名)、小田眞幸理事(会長指名)、河野円理事(会長指名)の20名と、駒田誠監事、笹島茂監事の2名です。任期は2017年6月の社員総会までの2年となっております。理事会一丸となってJACETの運営に当たりますのでどうぞよろしくお願いいたします。

2 アクションプランとその実行ステップ

樋口晶彦九州・沖縄支部長の陣頭指揮のもと、九州・沖縄支部の先生方のご尽力のおかげをもちまして、鹿児島大学で開催されました大学英語教育学会第54回(2015年度)国際大会は750人の参加者を迎え、成功裏に幕を閉じました。皆様に改めて御礼申し上げます。詳細は本通信の樋口支部長と馬場千秋国際大会組織委員会本部委員長、金岡正夫同支部委員長の原稿をご覧ください。

その国際大会の初日の会長講演と先述のWeb版におきまして、以下の会長として行う「アクションプラン」をお示いたしました。今回はその「アクションプラン」の概略を改めてご紹介するとともに、それらを実現するための具体的なステップを示します。

スタンダード JACETは、教育者でありかつ研究者である会員の研究教育の運動体である
アクションプラン1 研究レベルの向上と研究・教育成果のアウトプットの促進
アクションプラン2 グループ・組織の協働の場の創設と活性化
アクションプラン3 JACETとしての活動の活性化と明確化

2015年も12月になり、設立55年目(2017年)を目前にしたJACETが置かれた現在はどうのような時代にあるといえるのでしょうか。インターネットなどのテクノロジーは飛躍的に発展し、グローバル化は予想以上のスピードで進んでいます。それに伴い、英語を取り巻く環境も大きく変化しています。円滑なコミュニケーションを行うために、「聞く・話す・読む・書く」といういわゆる4技能を磨くことが大事なことは1962年の設立当時と変わりはありませんが、その質的な側面には変化が生じています。インターネットやビジネスの世界では非英語母語話者が英語を使用する割合がますます高まっています。電子メールやインターネットの利用が日常化し、英語によるプレゼンテーションやディスカッションができる技能が社会的にも求められています。タブレット端末の発達によりクラスルーム内で求められる技能も急速に変化し、コミュニケーションの形態も大きく変わってきています。

これらを具体的に示すFramework for 21st Century Learningという提言が米国のThe Partnership for 21st Century Skillsから出されたのでご紹介いたします。この取り組みはアメリカの文部科学省にあたるU.S. Department of Educationをはじめ、教育団体(National Education Association)と主要なIT企業(Apple Computer, Inc.; Cisco Systems, Inc.; Dell Computer Corporation; Microsoft Corporation他)が21世紀にふさわしい教育のあり方を検討するために2002年からスタートしました。現在、The Walt Disney Company, Goddard Systems, LEGO Education North America, Fisher-Price等の会社関係者や教育団体も関わっています。このFrameworkは21世紀に学習者が仕事や人生に成功するのに必要な知識やスキルを提示しています。知識としては、基本的な言語、数学、科学、

政治学に加え、グローバル的な認識、経済・経営的なリテラシー、市民意識、健康や環境リテラシーなどがあります。スキルとしては創造性やイノベーション力、クリティカル・シンキングや問題解決力とコミュニケーションとコラボレーション力があります。これに加えて、情報、メディアとテクノロジーや応用力、柔軟性、自己動機づけ、

責任感とリーダーシップなども挙げられています。

このFramework 中の世界の言語のリンクには、外国語教育についての記述があります。IN THE PASTは「以前」、TODAYは「現在を含む今後」の言語教育のおかれる環境を示しています。詳細は www.p21.org をご覧ください。

How Language Classrooms Looked in the Past Compared to Today

IN THE PAST	TODAY
Students learned about the language (grammar)	Students learn to use the language
Teacher-centered class	Learner-centered with teacher as facilitator/collaborator
Coverage of a textbook	Backward design focusing on the end goal
Using the textbook as the curriculum	Use of thematic units and authentic resources
Emphasis on teacher as presenter/lecturer	Emphasis on learner as “doer” and “creator”
Isolated cultural “factoids”	Emphasis on the relationship among the perspectives, practices, and products of the culture
Use of technology as a “cool tool”	Integrating technology into instruction to enhance learning
Only teaching language	Using language as the vehicle to teach academic content
Same instruction for all students	Differentiating instruction to meet individual needs
Synthetic situations from textbook	Personalized real world tasks
Confining language learning to the classroom	Seeking opportunities for learners to use language beyond the classroom
Testing to find out what students don't know	Assessing to find out what students can do
Only the teacher knows criteria for grading	Students know and understand criteria on how they will be assessed by reviewing the task rubric
Students know and understand criteria on how they will be assessed by reviewing the task rubric	Learners create to “share and publish” to audiences more than just the teacher

(https://www.actfl.org/sites/default/files/pdfs/21stCenturySkillsMap/p21_worldlanguagesmap.pdf)

上記の表からも明らかなように、インターネットなどのテクノロジーは21世紀になり、飛躍的に発展し、グローバル化は予想以上のスピードで進んできています。それに伴い、英語教育を取り巻く環境も大きく変化していることを如実にあらわしています。これらすべてが適当であるかは別として、現在このような状況である、あるいは今後そうなるであろうことを認識し、準備する必要があります。この表はあくまでも米国で作成された資料ではありますが、JACETとしても今後十分考慮する項目を数多く提示していると思いき紹介させていただきました。

それでは、そうした時代において、JACETが取り組むべき具体的な行動とは一体どのようなものなのでしょうか。『JACET通信』194号でお示し

しました1つのスタンダード（基本方針）と3つのアクションプラン（行動計画）をもう一度掲げさせていただきます。

特に、このスタンダードは本通信と一緒に送付された『会員名簿』の最初のページに記載されている『JACET綱領』を再び見直し、行動の拠り所とすることがまず第一です。

スタンダード JACETは、教育者でありかつ研究者である会員の研究教育の運動体である

まず、「JACETは、教育者でありかつ研究者である会員の研究教育の運動体である」ことをスタンダードとして掲げます。テクノロジーの進化やグローバル化の進行の速さに立ち位置を見失いがちな時代であるからこそ、自らの原点を再確認し、役割を自覚することが何よりも重要なのです。

そのスタンダードを具現化するためのアクションプランは以下のとおりです。(1) 個人・グループの研究・教育のレベル向上、(2) グループ・組織の協働の場の創設と活性化、(3) JACETとしての活動の活性化という3つのアクションプラン(行動計画)を掲げ、会員の皆様と共有していきたいと考えております。

〈アクションプラン1〉 個人・グループの研究・教育のレベル向上

- ・個人・グループ(研究会・特別委員会)の研究成果の公開

個人レベルはもちろん、研究会や特別委員会など集団による研究成果を積極的に公開できる場を提供していきます。2015年度からは研究会の成果物をWebで公開し始めました。さらに鹿児島大学での第54回(2015年度)国際大会では研究会の活動内容をポスター発表する機会を設け、多くの方が来場されました。こうした研究成果の公開は本学会が研究者集団であるがゆえの当然のことですから、さらに積極的に推進していきます。

- ・大学院生と若手研究者の育成

北星学園大学で開催される第55回(2016年度)国際大会から大学院生や若手研究者の育成を目指して、国際雑誌への投稿ができるように論文執筆に関するワークショップ(来年度の予定では大会初日の午前中)を開催し、さらに最新の研究に触れる機会を設けるため応用言語学の一領域を選んだ特別講義「State of the Art」シリーズを計画しています。

- ・教育レベルの向上

JACETにはさまざまな研究の成果を教育に応用し、実践に結び付けている会員の先生方が多数おられます。その良き実践例を可視化し、学会全体で共有して、普及させていくことで、大学英語教育全体に寄与していきます(これも来年度は大会初日の午前中の予定)。

〈アクションプラン2〉 グループ・組織の協働の場の創設と活性化

- ・実態調査の実施

JACETが全国の高等教育機関に学会員を抱えている組織であることを最大限に活用して、個人レベルではなく、学会全体として調査研究を行うことを奨励していきます。特に、JACETがほぼ10年ごとに行ってきた英語教育の実態調査を実施する必要があります。各大学の英語教育の実情を正

確に把握するために、アンケートとインタビューを実施するとともに、会員の皆様からの報告も踏まえて正確に実態を把握していきます。

- ・国内外の学会との協働・連携

JACET(日本)とその提携学会であるCELEA(中国)とALAK(韓国)という東アジアに位置する3つの応用言語学会の連携が「AILA East-Asia」という形で昨年度から始まりました。3つの組織の年次大会(国際大会)で順番にシンポジウムを開催することになり、今年はJACETが当番となって、鹿児島大学での第54回(2015年度)国際大会でシンポジウムが行われました。今後、こうした国内外の提携学会との連携活動を積極的に行い、さらには、提携学会の研究会同士の連携による共同研究も始まる予定です。同時に京都大学で行われた第52回(2013年度)国際大会で採択した「京都アピール」(国内3英語(言語)教育学会(一般社団法人大学英語教育学会(JACET)・外国語教育メディア学会(LET)・全国英語教育学会(JASELE)(順不同))からの同時発信(2013年9月17日))のように国内の英語・言語教育関連学会との協働も積極的に行っていく所存です。

〈アクションプラン3〉 JACETとしての活動の活性化と明確化

- ・ホームページの刷新

グローバル時代に対応すべく、学会の顔であるホームページの刷新を2016年4月に行い、迅速な情報発信を行います。ご期待ください。

- ・『紀要』と『Selected Papers』と各支部の『支部紀要』の棲み分け

『紀要』と『Selected Papers』をJACET Internationalとして、世界の研究者に認知され、読まれ、引用されるように準備していきます。そして、各支部でまとめられている『支部紀要』をJACET Domesticとして、JACET Internationalとの棲み分けを行い、若手を含めた多くの会員がチャレンジできる機会を増やしてまいります。

- ・「国際大会」「サマーセミナー」「英語教育セミナー」の見直し

「国際大会」と「サマーセミナー」、「英語教育セミナー」は、それぞれがJACETの良き伝統として広く認知されているところですが、時代の変化と共に制度疲労を起している面があることも否めません。今の時代に合う、グローバル化された現代にふさわしい学会イベントとなるように内容

そのものの見直しを進めています。次号では具体的な方向性をお示しできるように準備しております。すべて今後5年間のテーマを定め、各イベントが相互に関連していくようにしていきます。次号の『JACET通信』でご紹介できればと考えております。

・本部と支部の役割の再確認と協働

学会イベントにおいて、本部が果たすべき役割と支部が果たすべき役割は異なります。その役割分担を明確にして、多くの参加者を呼び込めるような企画運営へと刷新してまいりたいと思います。

前号（Web版）の繰り返しというご批判を受けることを承知の上で、「スタンダード」と「アクションプラン」を再度ご紹介させていただきました。これらを具現化するためには、役員はもちろんですが、会員の皆様お一人お一人の参画が欠かせません。JACETの発展と日本の英語教育に貢献できるよう最善を尽くしてまいりたいと思いますので、会員の皆様の益々のご理解とご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

3 2015年度各事業の活動報告

2015年度の事業ごとの学会活動の状況をお伝えします。

第1号事業

(1) 第54回（2015年度）国際大会の開催

鹿児島大学で「グローバル時代の異文化間コミュニケーション能力と英語教育」(Intercultural Communicative Competence and English Language Education in a Globalized World)をテーマに8月29日（土）から8月31日（月）の期間に開催されました。参加者は約750名となり、無事に終了いたしました。詳細は本通信の第54回（2015年度）国際大会のページをご参照ください。

(2) 第42回（2015年度）サマーセミナー

第42回（2015年度）サマーセミナーは、8月18日（火）から21日（金）の期間に草津スカイランドホテル（群馬県草津町）で開催されました。テーマは「授業内外のモバイルラーニング：バランスのよいブレンド型言語学習トレーニング」Mobile Learning in and out of the Classroom: Balancing Blended Language Learner Training)で、主任講師はMark Pegrum氏（The University

of Western Australia)、国内講師としてGlenn Stockwell氏（早稲田大学）と小張敬之氏（青山学院大学）をお招きしました。参加者による発表もあり、最終的に30名近くとなるセミナーとなりました。

(3) 平成27（2015）年度第3回英語教育セミナーの開催

平成27（2015）年度第3回JACET英語教育セミナーを11月28日（土）に神戸学院大学で開催いたします。テーマは「中高大グローバル教育最前線」(Global Education Reform at Schools and Colleges)です。賛助会員プレゼンテーションに引き続き、シンポジウムが石川 慎一郎氏（神戸大学）の司会のもと、講師として岩見理華氏（神戸大学附属中等教育学校）、羽藤由美氏（京都工芸繊維大学）、山中司氏（立命館大学）をお招きしセミナーのテーマについて議論する予定です。

(4) 支部大会・研究会の開催

それぞれの支部は、大会や研究会を随時開催しております。

第2号事業

(1) 『紀要』の刊行

『紀要』第60号を2016年1月下旬に刊行します。

(2) 『Selected Papers』の刊行

第52回（2013年度）国際大会から、発表した発表者の学術研究を奨励するために、論文発表の機会をSelected Papersとして与えることになりました。第2号の編集もほぼ終了し2016年1月にウェブサイトに掲載いたします。

(3) 『JACET通信』の刊行

『JACET通信』第194号（日本語、Web版）を2015年7月1日に刊行しました。第195号（日本語、印刷版とWeb版）を2015年12月1日に、第196号（英語、Web版）を2016年3月1日に刊行する予定です。

(4) 『支部紀要』・『ニューズレター』の刊行

それぞれの支部が『紀要』と『ニューズレター』を随時刊行しております。

第3号事業

大学英語教育学会賞の表彰

英語教育における研究または実践上の顕著な業績を通してわが国における大学英語教育の改善と進歩・発展に寄与した本学会員である個人または団体に対して、大学英語教育学会賞を授与しています。本年は、同賞学術出版部門と同賞新人論文

部門のそれぞれ1件ずつに授与し、国際大会においてその表彰式が行われました。なお、大会時の学生会員幹事発表者の中からその最も優秀な学生発表を行った学生会員に対して、同賞新人発表部門を授与いたしました。詳細は本通信の大学英語教育学会賞のページをご覧ください。

第4号事業

協力事業—関係学術団体との交流

(1) 海外の学術団体との交流

- 以下の提携学会の年次大会に本学会の代表を派遣し、招待講演を行い、さらには、シンポジウムに参加したりしております。また各提携学会からの代表者を第54回（2015年度）国際大会に招待いたしました。RELC (Regional Language Centre), KATE (The Korea Association of Teachers of English), MELTA (Malaysian English Language Teaching Association), PKETA (Pan-Korea English Teachers' Association), ALAK (The Applied Linguistics Association of Korea), ETA-ROC (English Teachers' Association of Republic of China), CELEA (Chinese English Language Education Association), Thailand TESOL, AILA (Association Internationale de Linguistique Applique)
- AILAのボードミーティング（理事会）が2015年8月27日（木）と28日（金）に鹿児島県のJR九州鹿児島ホテルで開催されました。

(2) 国内の学術団体との交流

国内ではJALTとの学術交流を行うべく正式な契約書を交わしました。今後もこうした連携を模索していきます。

第5号事業

調査研究事業

(1) 専門分野別の研究会

現在44の研究会が活発な活動をしており、その支援を強化しております。

(2) 特別委員会

現在、下記の3委員会が活動しておりますが、2016年3月末でその活動はすべてが一度終了となり、その研究成果が報告書（Web版もあり）あるいは本として刊行される予定です。

・第4次ICT研究特別委員会

今年度末に報告書を刊行いたします。

・グローバル人材育成特別委員会

特に、今、英語教育関係諸機関で議論・検討されている「大学入試での外部試験の導入」に焦点をあてたもので、その研究成果として報告書（Web版）が2016年3月31日に刊行され、文部科学省高等教育局に提出する予定です。

・基本語彙改訂特別委員会

「新大学英語教育学会基本語リスト 新JACET 8000」の作成に向け研究を重ねて参りましたが、2016年3月にWeb版と本として刊行されます。

上記の様々な活動に加え、内部的には研究促進委員会が学会としての研究全体の相互調整を行っております。外部的には、学会の社会的責任を果たすために、新たな外国語教育への提言を文部科学省に対して行い、外部資金の調達を基本とした受託研究や共同研究を推進していく予定です。特に、グローバル化時代に対応して、国内の言語教育諸団体との連携や海外提携学会との本格的な共同研究を進めております。会員の皆様の学会活動へのますますの積極的なご参加を期待しております。よろしくご申し上げます。

会員の皆様へ

昨今、文部科学省や所属大学等から、教育や研究に関する法令や倫理規定に関する注意喚起が行われています。会員の方々にはそれらを遵守し、日本の高等教育に携わる責任を自覚した行動をとっていただくよう希望いたします。

To JACET members

Recently, the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) and the universities have been issuing alerts about following ethics codes and regulations in relation to educational and research activities. JACET expects its members to adhere to ethical and legal standards expected by the professional community in which they practice.

退任のご挨拶

一般社団法人大学英語教育学会前会長 神保 尚武

早稲田大学

平素より学会活動に格別のご協力を賜りありがとうございます。小生の会長としての任期が終了いたしました。6月21日に開催された社員総会で新役員が選出され、寺内一先生が新会長として陣頭指揮をとることになりました。すでに今年度のサマーセミナーや国際大会を成功に導きました。役員の皆様の活躍を期待します。

小生の任期の5年間を振り返りますと、学会の法人化、50周年記念事業と他学会との連携強化に多くの時間を費やしました。国際大会での英語の発表が飛躍的に増加したことは大変喜ばしいことでした。海外の学術団体との交流は活発になりました。各学会へJACETからの代表を派遣し、反

対にこれらの代表者を国際大会に受け入れて活発な学術交流を行いました。さらに、国内諸学会との交流も深まりました。

一般社団法人として安定した健全な運営が可能となりました。本学会は会員一人ひとりの皆様のために存在します。バラエティにとんだ多岐に渡る事業を有効に活用していただきますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

最後に、小生を支えてくれた役員の方々と事務局の皆様に深甚な感謝を申し上げます。

会員皆様のますますのご発展をお祈りいたします。

廣 告

第54回(2015年度)国際大会を振り返って

九州・沖縄支部長 樋口 晶彦
鹿児島大学

まず、本国際大会の準備、開催、進行などに関わって頂いたJACET会長、本部事務局、担当役員の先生方、支部委員会、学生アルバイト他多くの皆様方に対して心より御礼を申し上げます。有難うございました。特に金岡、原、川北、入江、坂本の支部委員会の先生方にはこの二年間、準備、進行他、大変過酷な日々を過ごされたこと、支部長として厚く御礼を申し上げます。特に今回は、国際大会組織委員会支部委員長の金岡先生の御尽力に負うところが大きく、スタッフに恵まれておりましたことも幸いなことでした。今、こうして無事になんとか大過なく終了することが出来て安堵しているところです。

本年度の大会テーマは“*Intercultural Communicative Competence and English Language Education in a Globalized World*”でありました。裾野の広い、時代のテーマでもあり、研究発表の中には新進気鋭の研究も見られたのではないのでしょうか。本年度の国際大会は8月29日から31日までの三日間、鹿児島大学教育センター、稲盛会館、稲盛アカデミー、学習交流プラザなどを中心に開催されましたが、逆風も少なくありませんでした。まず、大会数日前には最大瞬間風速45メートルの台風の襲来を受け、さらに桜島の爆発、避難情報などのニュースが国内を跋扈して学会開催への逆風が強かったのです。深いため息を何度も味わいましたが、終わってみれば、参加者が約750名、懇親会参加者は250名ほどと伺っていますので、今大会は概ね良好と考えているところです。

長いJACETの歴史において、国立大学での全国大会の開催は、小生の経験したところでは宮城教育大、京大、そして鹿児島大と三校目だった記憶



があります。鹿児島大学は私学と異なり、中々施設、設備面で劣るもので、ずいぶん苦慮したことも少なくありませんでした。しかし、その分、薩摩を印象付けるべく示現流を導入しさらに教育学部教員合唱団シグマにも一肌、脱いでもらったわけです。

しかし、こうしたアトラクションが好評を博した一方で、反省事項も少なくありませんでした。この場では割愛しますが、これらの反省点は未来に禍根を残さないようにこれから検証していく必要がありますし、逆に良かった点は今後も継承していくことが求められると考えています。

又、本年度はAILA、EBIC関連の会合も学会前に開催されてその重責を担われたJACET前副会長の山内ひさ子先生の仕事ぶり、先見の明、自己犠牲の精神、さらに御担当のシンポジウムに対しても中々真似出来るものではなく色々勉強させて頂きました。

最後になりましたが、何度も何度も申し上げます。皆様、本当に有難うございました。御苦労様でした。心より御礼を申し上げます。来年は北の大地で御会いしましょう。

大会報告

国際大会組織委員会本部委員長
馬場千秋
(帝京科学大学)

第54回(2015年度)国際大会は、2015年8月29日(土)、30日(日)、31日(月)の3日間、鹿児島県鹿児島市の鹿児島大学郡元キャンパスにて、「グローバル時代の異文化間コミュニケーション能力と英語教育」というテーマで開催されました。発表件数は合計220件、参加者は約750名でした。8月に入ってから、桜島の噴火警戒レベルが4に上がったため、心配をされた参加者の方も複数いらっしゃいましたが、大会期間中は噴火をすることもなく、無事に開催をすることができました。

基調講演と全体シンポジウムでは、グローバル時代にどのようにして、英語コミュニケーション能力を養成していくべきか、様々な観点からの示唆を得ることができました。

第52回(2013年度)国際大会から行ってきた特別企画「グローバル人材育成のための大学英語教育の取り組み」は、今年が最終年で、4つの分野のポスターセッションを行いました。第1分野「小中高大の連携」に10件、第2分野「複数の大学同士の相互交流」に5件、第3分野「諸外国の教育機関との国外連携」に18件、第4分野「企業や国際機関との異分野連携の取り組み」に4件の参加がありました。

本大会では、文部科学省、鹿児島県教育委員会、鹿児島市教育委員会の後援をいただきました。ありがとうございました。

最後になりましたが、本大会開催に際し、素晴らしい施設をご提供いただきました鹿児島大学、準備段階からご尽力いただきました大会委員長の樋口晶彦先生、国際大会組織委員会支部委員長の金岡正夫先生、鹿児島大学の坂本育生先生、原隆幸先生、ならびに九州・沖縄支部の委員の先生方、本部委員の先生方、事務局の皆様にご心より御礼申し上げます。

担当支部と会場校から

国際大会組織委員会支部委員長
金岡正夫
(鹿児島大学)

第54回(2015年度)国際大会が2015年8月29日～31日の3日間、鹿児島大学(郡元キャンパス)で開催され、盛会のうちに幕を閉じました。750名近くの参加者(国内、海外、企業展示関係者)があり、雨天にも拘わらず、基調講演、招待講演、シンポジウム、研究発表、学生発表、ワークショップ、支部企画シンポジウムなど、多彩なイベントに多くの参加者が広い会場を歩き来しました。

大会テーマは「グローバル時代の異文化間コミュニケーション能力と英語教育」であり、Claire Kramersch先生(カリフォルニア大学)、Daniel Perrin先生(Zurich University of Applied Linguistics)、Celeste Kinginger先生(ペンシルバニア州立大学)の基調講演をはじめ、海外提携学会の招待講演も含め、グローバル&異文化の枠組みについて、熱いセッションが展開されました。

2年前に本部より大会運営マニュアルを手渡され(否、手渡して頂き一苦笑)、九州・沖縄支部役員会を母体に国際大会組織委員会支部委員会を立ち上げ、準備会合や本部からの会場校視察を経て本番を迎えるに至りました。会場担当校として、看板、横断幕、エキシビション、懇親会、会場のデザイン等を進める一方で、大会前日には支部委員会の先生方やアルバイト学生約30名と協働しながらすべての準備を終えることができました。もっとも心配なのは会場でした。各会場でのトラブル(PC接続の不具合等)にはメカに詳しいアルバイト学生や実行委員のスタッフを充て、現場対応を迅速に行い、何とか乗り切れたことが一番の安堵です。雨天ながらも時折曇り空や明るい陽射しものぞきました。何より桜島の火山灰が皆無であったことは幸いでした(夏の間は火山灰が連日降ってくるのですが)。

エキシビションでは「地元のアピール」が慣例行事となっており、薩摩伝統の武芸、「自顕流(示現流という書き方もあります)」が披露され、海外招待者だけでなく、国内からの参加者も楽しん

でもらえたことと思います。さいごに開催にあたり、寺内JACET会長、組織委員会本部の馬場委員長、事務局の荒川様、保坂様、組織委員会の皆様、支部委員会の皆様、アルバイト学生諸君に深く御礼申し上げます。大好評であった懇親会の食事を提供くださった鹿児島大学生協様にも深く御礼申し上げます。後援を頂いた文部科学省、鹿児島県ならびに鹿児島市教育委員会に御礼申し上げます。そして鹿児島観光コンベンションビューローの方々にも感謝申し上げます。

講演・シンポジウム

*要旨については、大会要綱に記載されたアブストラクトを転載しております。なお、基調講演2、基調講演3、会長講演は来年に刊行されるJACET *International Convention Selected Papers* Vol. 3に invited paper として掲載される予定です。

【基調講演 1】

Intercultural Competence in the Digital Age

Claire Kramsch (U.C. Berkeley, President of AILA)
Moderator: Noguchi, Judy (Kobe Gakuin U.)

The digital age has been characterized not only by increased opportunities for online communication across cultures and for building communities of practice within and across national borders, but also by an exacerbated desire for visibility and popularity. Facebook, twitter, blogs have transformed the notion of cultural community and intercultural communication. Intercultural competence (Byram 1997) used to be defined as the ability to be curious and open about other cultures, to learn about social, cultural, and political values different from one's own, to mediate between one's own worldviews and those of others, and eventually to be transformed in the



process. The use of social media, by contrast, seems to have become for many the ability to make themselves heard and visible, and to join in a community of like-minded individuals who all share the same global values. Communication across cultures, that used to be based on an effort to understand the Other, now seems to be based on unfulfilled desires of liberation and validation of the Self (Harcourt 2015) and on the value of communication for communication's sake (Castells 2009).

Thus today, intercultural competence seems to apply to two kinds of culture: On the one hand, the local cultures that consist of shared traditions and values that can be studied through texts and other authentic materials. These cultures are no longer as homogenous as they once were; moreover, they have often become commodified by the media and the tourism industry and have become pretty stereotypical. On the other hand, the global culture of communication that thrives on multiplicity, diversity and change, and has its own discourse and values. I will try and tease out these two different ways of considering culture and intercultural communication. I will discuss the potential of each one for learning and teaching intercultural competence in foreign language education today.

【基調講演 2】

Investigating Intercultural Communication in the Workplace: Applied Linguistics as Research on, for, and with Practitioners

Daniel Perrin (AILA Vice President, Zurich University of Applied Linguistics)
Moderator: Yamauchi, Hisako (Former Professor of the University of Nagasaki)

This keynote is about intercultural communication in the professional workplace (Candlin, 2003). Referring to large corpora of data collected in multilingual and multicultural newsrooms, I explain how research on

practitioners can be turned into research *with* and *for* practitioners (Cameron, Frazer, Rampton, & Richardson, 1992, 22). In doing so, I draw on two decades of multimethod research and knowledge transformation at the interface of applied linguistics and transdisciplinary action research on professional communication (Perrin, 2013).



In a globalized world, workplace communication entails the transgressing of boundaries between “discourse systems” (Scollon, Scollon, & Jones, 2012) such as linguistic varieties and languages used by people from diverse regions, professions, and societal groups. Applied linguists thus find themselves in the comfortable position of being in increasing demand outside the classroom. This means, however, that society-at-large expects us to identify and analyze socially relevant “practical problems of language and communication” (AILA mission statement, www.aila.info) and to contribute substantially to sustainable solutions. Such a sustainable solution is the focus of this keynote address.

As a first step, I outline a national broadcasting company’s challenge of fostering societal cohesion in times of mediatization, globalization, and competitive media markets. I then proceed to explain why, in the specific, but typical case of the Swiss public broadcasting company SRG SSR, media policy and media management developed quite contradictory expectations of what it means to “promote public understanding” . I describe the research framework that we applied to analyze and finally solve this problem, based on principles of applied linguistics and transdisciplinary action research.

In our research on, for, and with practitioners, a detailed analysis of “local” practices (Pennycook, 2010) – intercultural workplace negotiations and writing activities – has shown how experienced journalists manage to find emergent solutions that overcome the conflict

between media policy and management. I conclude by discussing measures that can bring back the experienced journalists’ “tacit” knowledge (Polanyi, 1966) to the entire media organization and society at large.

【基調講演3】

Japanese Language Learners Abroad in an Era of Globalization

Celeste Kinginger (Pennsylvania State University)
Moderator: Higuchi, Akihiko (Kagoshima U.)

Research clearly demonstrates that study abroad can facilitate language development in every domain, and that it is particularly useful for the development of pragmatic and social interactive abilities. However, most studies reveal important individual differences both in the quality of these experiences and in their outcomes. Much depends not only upon the ways in which learners are received by their host communities, but also upon the personal desires and dispositions students themselves bring to their experiences. This presentation will provide an overview of recent research involving Japanese learners of English in Anglophone settings. Most of the outcomes-oriented research examines the development of specific interactive capabilities such as speech act realization or mastery of formulaic language typical of expert English language use, usually defined by default as Native Speaker usage. The limited qualitative inquiry suggests that, like other students, Japanese learners may struggle for access to engagement in local communities. Meanwhile, however, their imagined communities appear to be changing with the times. While some students are very much attached to notions of English as access to specifically Western values and worldviews, others imagine themselves belonging



to international, translingual communities where English functions as a *lingua mundi*, and Native Speaker values or norms do not apply. Strikingly, it is engagement in non-local communities, from which Native Speakers can in fact be excluded, that is most relevant to these latter students. The presentation will conclude with some questions about the definition of expertise in English today, and their implications for research, pedagogy and the design of study abroad programs.

【会長講演】

English Language Education in the Global World: Overview of JACET's History and Challenges for its Next Step

Terauchi, Hajime
(Takachiho University; President of JACET)

Moderator: Jimbo, Hisatake
(Professor Emeritus, Waseda U.)

The Presidential Speech at the JACET 54th (2015) International Convention at Kagoshima University consists of the following three parts. The first is an overview of the history of JACET from its inception in 1962. The second part reviews the current situation of English language education in Japan as well as around the world. This includes concepts related to the need for more effective language teaching and learning in preparation for active participation in the global community. The final part introduces three action plans for JACET in 2015 and presents future prospects for this organization.

【国内招待講演】

Varieties of Current English and English Teaching

現代英語の多様性と英語教育

—社会言語学の視点から—

杉本 豊久 (元成城大)

紹介者: 佐野 富士子 (横浜国立大)

学生たちに「なぜ英語を勉強したいのか？」と尋ねれば、決まって「字幕なしで洋画が見たい」と答えます。こんな消極的な動機で、我が国の大学生がアジアの大学生に勝てるはずはないのですが、学生にも言い分があります。「授業で習った英語力では、洋画の英語がちっとも分かりません。これは教える側にも問題があるのでは？」と言うのです。この反論には一理あります。映画に登場する人々の話す英語は実にさまざまで、授業で学ぶ英語表現の域を遙かに超えているからです。例えば「教材」一つをとってみても、現在世界中で話されている英語群の多様性が、必ずしもその中に反映されていないのではないのでしょうか。このような視点から、私はここ数年「ドラマの英語：最近の映画を楽しむ」という講座を担当し、最近の映画を教材に授業を実践しております。なるべく英語の多様性が反映されているような作品を選び、学生には、登場人物のせりふを社会言語学的視点から分類・分析させます。つまり、どんな場面で・誰が（どんな人物？：出身地は？ 育ちは？ 職業は？）・誰に向かって・どんな気持ち（意図）で発話しているのか？ 話し手と聞き手の関係は？ 話題は？ という具合です。そうすると、セリフの客観的情報内容のほかに、より深い、いわゆる社会的情報が理解できるので、話者の隠れた心理的意図や、脚本家や監督の意図までも浮き彫りにできるのです。授業の準備のために同じ作品を100回ぐらい視聴しますが、毎回のよう新しい発見があります。編集過程で矛盾した映像が繋がっていることを発見したり、字幕の誤りを発見したり、映画の導入部分の分析で新しい発見をしたりすると、学生は盛り上がります。アクティブラーニングを実感します。講演では、実際に授業で使っている映画の一部を紹介しつつ、現代英

語の多様性を授業に取り入れる試みの一端をご覧ください。

【提携学会招待講演 1】

Cooperating Principles for English Communication with Global Audience

Jihyeon Jeon

(Ewha Womans University; ALAK)

Moderator: Horibe, Hideo

(Hiroshima Institute of Technology)

With the advent of globalization, English communication has expanded to include diverse speakers and contexts. When we communicate in English with global audience, we often experience discomforts because of the feeling of not being sure of understanding and being understood due to the difference in perceptions, cultures, communication styles, and mother tongues. How then can we overcome these discomforts in communicating with people from other cultures and make our English communication successful with unfamiliar audiences? Is it possible to learn about all the features of varieties of English? The rules for the use of English would be neither right nor wrong. The rules would only be useful for the particular applications to which we apply them within a given context for members of the communication act. As it is impossible to learn all the rules for all possible games, it is hard to learn all the features of all varieties of English found in English communication. But we may develop strategies to adapt to our audience in any given communication situation. This presentation attempts to (a) identify some of the difficulties experienced in English communication among people of different cultures and mother tongues, and (b) suggest cooperative principles to make English communication successful, considering the global audience. With people of a different culture, specific efforts to deal with differences in perception, culture, and communication style are required, including the principles of (a) providing

more clues, (b) explaining more and asking more, (c) using verbal communication, (d) making communication specific, and (e) making communication direct. Additionally, special attention should be given to the difference in mother tongues by considering syntax, phonology, morphology, and pragmatics.

More discussion and integration are needed among scholars in relevant fields to further understand English communication among people of different cultures and native tongues to reshape the framework of the current English language learning and teaching to better accommodate the global realities in English communication.

【提携学会招待講演 2】

Enhancing Students' Intercultural Competence through a Short-Term Study-Abroad Program

Nopporn Sarobol

(Thammasat University; Thai-TESOL)

Moderator: Yokoyama, Shozo

(University of Miyazaki)

Students joining an international program abroad will experience cultural diversity, new perspectives, personal growth and increase their understanding of the international and global world (Balasek, 2013). The objective of this study is to investigate the benefits participants found the most valuable during their experiences in a short-term study-abroad program at the University of British Columbia, located in Vancouver, Canada. The participants in this study consisted of twenty-nine students participating in a six-week study-abroad program provided by The Language Institute of Thammasat University, Thailand. The questionnaire was used to survey the benefits of studying abroad in various aspects including cultural understanding. The study also revealed the benefits of participating in this program from the essay written by the students at the end of the program. Overall

findings show that the majority of the participants mostly agreed that they had improved the English proficiency development, gained living experience from studying abroad and particularly had better attitudes about cultural understanding. According to the students' perceptions in the essay, it was shown that the benefits from the program can be divided into three categories: the benefits to their confidence, independence and maturity, the benefits to their language development and the benefits to their intercultural competence.

【提携学会招待講演3】

Higher Education Internationalization Needs New Goals, New Attitudes and New Curricula for the Teaching of English

Siusana Kweldju
(SEAMEO Regional Language Centre)
Moderator: Ishikawa, Shin'ichiro
(Kobe University)

A response to the impact of globalization is the internationalization of higher education (HE). HE internationalization is not only driven by the stakeholders of HE institutions, but also by the metrics issued by university rankings and accreditation agencies. Internationalization has led to new cooperation, academic mobility and exchange programs for students, lecturers and researchers. However, HE internationalization in EFL countries, or in Kachru's terminology, Expanding Circle (EC), faces linguistic challenges that have never taken place in inner circle countries, and almost never in outer circle countries. The reason is that to participate in international exchange activities, more often than not students and scholars from EC countries have to demonstrate evidence of an adequate level of native-speaker-based conceptions of proficiency. This requirement is fast becoming a norm even for short term exchange programs/events which are held in EC countries with none of the

participants being native speakers of English. If this norm persists, HE internationalization in EC countries tends to benefit mainly English-major students and the more privileged students from non-English Department. It will not fully build a new generation of productive and resourceful citizens who are ready to solve local problems. This paper, therefore, questions the validity of this requirement for EC, because the mission of EC countries is to adopt various HE internationalization strategies to expose their scholars and aspiring scholars of diverse academic backgrounds to hands-on knowledge, experience and expertise in solving real-world multidimensional problems. This paper also highlights the importance of new attitudes, learning goals, and curricula for the teaching and learning of English in HE institutions in EC countries. It argues that what students need are attainable practical communication and interpersonal skills for today's real-life environments. It concludes that English should be taught based on the macro level of the global need of English as a lingua franca and that native-speaker norms of accuracy are unnecessary.

【提携学会招待講演4】

Enhancing EFL Learners' Language Proficiency via Literature: A Preliminary Exploration

Yiu-nam Leung (Takming University of Science and Technology; ETA-ROC)
Moderator: Asakawa, Kazuya
(Tokaigakuen University)

Literature has been widely used in ESL/EFL classrooms to enhance learners' English proficiency (Brumfit, 1986; Collie, 1987; Carter, 1991; Lazar, 1993; Showalter, 2002; Parsan, 2006; Beach, 2011; and others). EFL learners in college level, however, often misconceived that literature is too abstract, difficult, philosophical, irrelevant to their daily life experience, archaic vocabulary, sophisticated meaning, complicated

language structure, etc. How could instructors help learners correct their misconception of literature? How could literary texts be effectively used in an EFL classroom in Taiwan to improve learners' language proficiency? This paper aims to dismiss EFL learners' misconception and discuss some of strategies as well as approaches used to facilitate them to understand literary works of art by using Alice Walker's "Everyday Use" as an example. Short stories are appropriate teaching materials, for they are short, plot simple, characters limited, and messages easily to be detected. It is hoped that EFL learners in college through their active participation in class activities and completion of assigned tasks will eventually become autonomous and responsive to literary texts.

【提携学会招待講演5】

Online Peer Feedback in an ESL Context: Attitudes and Friendship Bias

Zati Hulwani binti Mustaffa (Kolej Universiti
Islam Sains dan Teknologi; MELTA)
Moderator: Murakami, Hiromi
(Kansai Gaidai College)

In recent years, peer feedback has received much attention due to growing focus on learner independence and autonomy throughout the world. This study is twofold. Firstly, it focuses on comparison between teacher feedback and online peer feedback of college students' short essay composition. In addition, it also examines whether there is possible friendship bias in online peer feedback and if there are any impacts of this study to learners' attitudes towards it.

The subjects in this study were 30 students from two classes. They were divided into two groups—the focus and control groups. The focus group received teacher and online peer feedback while the control group received teacher feedback only. The online peer feedback of compositions, teacher feedback, and post-questionnaire were the subsequent practices that

have been used respectively. To examine the collected data from the 30 subjects who participated, paired-sample t-tests and chi square were applied. The findings reveal no significant differences in terms of attitudes between learners from both groups but friendship was affected by the peer feedback even with anonymous evaluation.

【九州・沖縄支部企画シンポジウム】

Intercultural Communicative Competence and Study Abroad Kyushu-Okinawa Chapter Symposium

Celeste Kinginger (Pennsylvania State University)
Furumura, Yumiko (Nagasaki University)
Kakimoto, Etsuko (Kyushu Sangyo University)
Shimizu, Toshihiro (Kyushu University)

Intercultural Communicative Competence (ICC) is the main topic of this conference and one of the key concepts of language learning in the 21st century. However, it is not easy to build ICC only in the classroom in a (pseudo-)mono-cultural society such as Japan. Study abroad is one of the most effective ways to cultivate ICC. Celeste Kinginger, one of the invited speakers to the conference, opens the symposium with her ideas about study abroad and its effects on ICC. Three panelists from Japan, Yumiko Furumura, Etsuko Kakimoto, and Toshihiro Shimizu, demonstrate their experiences and some data from study abroad programs they were involved in and its implication to develop ICC. Yumiko Furumura shows one of the courses to enhance students' motivation to study abroad by raising their curiosity about foreign countries which is a component of ICC. Etsuko Kakimoto discusses the effects of social interaction on study abroad participants based on the data obtained through a meticulously arranged short-term program as a selective course in the curriculum at her institution with cooperation from its partner college. Toshihiro Shimizu introduces one of the short-term study abroad programs offered to the

students of his university and discusses some results of the interviews and questionnaires to the participants of the program.

【AILA East Asia シンポジウム】

Teaching Culture in English Classes in East Asia

<AILA East Asia Symposium>

Joo-Kyung Park (ALAK)

Jihyeon Jeon (ALAK)

Wen Qiufang (CELEA)

Xun Xiaoming (CELEA)

Masaki Oda (JACET)

Coordinator/Chair: Hisako Yamauchi (JACET)

Commentator: Daniel Perrin (AILA)

The three AILA affiliates (ALAK, CELEA and JACET) join the Second AILA East-Asia Forum at the JACET 54th International Convention to expand and promote the academic activities of AILA in the East Asian region. The theme of the forum is “Teaching Culture in English Classes in East Asia”, which will also contribute to the aim of the convention theme.

In teaching English, we inevitably teach English culture, as language and culture are inseparable entities. However, we teachers of English as a foreign language tend to place more emphasis on language skills than culture in class. If the learners of English send a message that is culturally unacceptable, misunderstanding may arise even if the sentences are grammatically correct. Moreover, this issue has become more complicated in the context of teaching English as a lingua franca because the users of English are dramatically increasing from different countries with diverse cultures in international settings. To teach the target language culture only seems insufficient to resolve misunderstanding caused by differences between multi-cultures. Such a change in current English teaching has posed more challenges on teaching cultures in English lessons. In this panel discussion, English teachers from Korea, China and Japan will exchange their

views and practice to meet these challenges. The two speakers of ALAK will present how culture is taught in English classes in Korea. The major issues and concerns regarding teaching culture in Korean EFL classes will be addressed, including Korean English teachers' lack of competence and confidence in teaching culture. Some resolutions and suggestions will be provided including a Korean government project on developing material for teaching culture in middle school English classes. The speakers from CELEA will first describe how the issue of teaching culture is perceived in the Chinese context of teaching English as a lingua franca and then explain how cultures (the native English culture, the Chinese culture and the cultures of other non-native English speakers) are taught in China. Following the presentations on the Korean and Chinese contexts, the speakers from Japan will present cases from university English programs focusing both on cultures as contents and that of classroom. It is our hope that the insights of the panelists together with lively discussions with the audience will enrich our understanding of teaching intercultural competence.

【全体シンポジウム】

Intercultural Communicative Competence and English Language Education in a Globalized World

Claire Kramsch

(U.C. Berkeley, President of AILA)

Mae-Ran Park

(Pukyong National University, President of PKETA)

Nobuyuki Honna

(Professor Emeritus, Aoyama Gakuin University,
Visiting Professor, Bunkyo Gakuin University)

Moderator: Hisako Yamauchi

(Former Professor of the University of Nagasaki)

In a globalized world, intercultural competence has become imperative for foreign language learners in order to conduct effective and appro-

priate communication with people of other cultures. As English teachers, we need to instruct our students in the way they can acquire such competency as they improve their English skills. In this plenary symposium, we welcome three distinguished scholars who will share their ideas with us. The first speaker is Claire Kramersch from U.C. Berkeley, who will give us examples of how intercultural competence could be better taught in foreign language classrooms and discuss it from a theoretical point of view. The second speaker, Mae-Ran Park from Pukyong National University will examine how intercultural competence is taught in Korea. Finally, Nobuyuki Honna, Professor Emeritus of Aoyama Gakuin University, will discuss English as an international language and intercultural literacy viewing English used in the world today as a multicultural language. After the above talks, we look forward to interesting and fruitful discussion with the audience. The titles of the panelists' speeches, as well as their abstracts, are below.

Why is culture still such a controversial word in foreign language classrooms?

Claire Kramersch (U.C. Berkeley, President of AILA)

Despite decades of efforts in Applied Linguistics to define culture and to conceptualize how intercultural competence can and should be taught in foreign language classes, the term 'culture' is still likely to elicit in teachers sighs of despair or the shrugging of shoulders. They don't know what it is, they don't know how to evaluate it, they don't have time to teach it. Learners don't care about it and don't want to have culture "rammed down their throats" (Byram & Kramersch 2008). I will try and make sense of these negative reactions on concrete examples from the classroom.

The current status of intercultural teaching and learning in Korea

Mae-Ran Park
(Pukyong National University, President of PKETA)

It is well known that language and culture interact with each other very closely, and indeed culture virtually connects with all levels of language use and usages. In my presentation, I will first give an overview of the current status of intercultural teaching and learning in Korea, especially at the secondary school level. I will do this by reviewing relevant studies conducted in Korea as to how the target culture is treated in relation to English textbooks and classroom activities. Then, some of the key issues and challenges in Korean English education will be highlighted. Insights gained from this endeavor will shed light on how intercultural competence may be dealt with in EFL contexts.

English as an international language and intercultural literacy : A pedagogical discussion

Nobuyuki Honna
(Professor Emeritus, Aoyama Gakuin University, Visiting Professor of Bunkyo Gakuin University)

The global spread of English has not ended up with the global acceptance of American English or British English as the standard of usage. Instead, it has established English as a multicultural language. At the same time, there have occurred new types of problems. One of them concerns mutual communicability among speakers of different varieties of English. To improve this situation, it is indispensable that we address diversity management in English language teaching (ELT). In this presentation, I will discuss intercultural literacy as a pedagogical response to the demand of diversity management of English as a multicultural language in ELT. I will also show how language awareness teaching plays an essential component in this pedagogical endeavor in Japan.

【特別シンポジウム】

Three Reports from the JACET Global Human Resource Development Special Committee

グローバル人材育成のための大学英語教育の取り組み

—グローバル人材育成特別委員会の調査結果より—

司会・提案者：寺内 一（高千穂大）

提案者：尾関直子（明治大）

中野美知子（早稲田大名誉教授）

山内ひさ子（長崎県立大元教授）

大学英語教育学会は、2013 年度より3 年間の活動として、「グローバル人材育成のための大学英語教育の取り組み」を調査してきた。本調査では、国際社会で通用するグローバル人材の育成を積極的に行っている各大学の取り組みを把握し、これらの知見を広く共有することで、日本の英語教育の発展に資する機会とすることをスローガンとして掲げてきた。

1 年目の第52 回(2013 年度)国際大会では、「グローバル人材育成のための大学英語教育の取り組み」をテーマに、グローバル・ポスタープレゼンテーションを募集した。全国各地の大学・学部等の組織から88 件の申し込みがあり、大会期間中のポスター展示を通じて、各組織の意欲的な活動が紹介された。2 年目の第53 回（2014 年度）国際大会では、「グローバル人材育成のための大学英語教育の取り組み」をテーマにした第2 弾として、「到達目標とその評価」および「留学生派遣プログラム」の2 つの分野に絞り、前年に続いてグローバル・ポスタープレゼンテーションを募集したところ、46 件の申し込みがあり、大会期間中、特徴ある英語教育の取り組みが紹介された。同年はさらに、「大学英語教育における『教育の質保証』と『外部試験』導入の関係性」と題した特別シンポジウムを行った。英検、TOEIC、TOEFL などの代表的な英語外部試験の実施団体の関係者に登壇していただき、外部試験を取り巻く状況について共有し、活発な議論がなされた。

一方、国際大会期間中の発表やシンポジウムだけでなく、本学会においても、2014 年4 月に「大

学英語教育学会グローバル人材育成特別委員会」を立ち上げ、3 つのテーマごとに班に分かれて調査研究に取り組んできた。特別委員会の各班の具体的活動は、以下の通りである。

・第1 班「外部試験大学実態調査」：各大学における外部試験の使用について、本学会会員を対象に調査を行い、大学入学時の外部試験の使用状況を把握する。

・第2 班「外部試験調査」：各テスト団体を対象にアンケート調査を実施し、その結果をまとめる。さらに、大学入試センター試験と外部試験問題の内容を分析し、入学・卒業両方に関連する外部試験の実態を把握する。

・第3 班「到達目標実態調査」：各大学が設定する「到達目標とその評価」の把握と、専門分野別（薬学；工学；観光学；ビジネスを対象）の到達目標を提示している既存のシラバスを収集し、それらが大学の到達目標とその評価、さらにCEFR のレベル等を反映しているかを調査する。

最終年度となる本年度は、「グローバル人材育成特別委員会の調査結果より」と題するサブテーマを掲げた特別シンポジウムを実施する。本シンポジウムでは、上記3 つの調査研究班の代表に登壇いただき、各班の調査研究の中間報告と、各班のテーマにおける今後の方向性について議論を行う。グローバル人材育成を念頭に置いた上で、「外部試験」と「外部試験を活用した到達目標」の2 つを中心に議論していくことにより、大学英語教育におけるグローバル人材育成がどのような方向を目指すべきかについての共通理解を深める場としたい。

.....

【大会記録】

大会発表件数・展示参加団体数報告

第54 回（2015 年度）国際大会の発表件数は、基調講演3 件、特別講演（会長）1 件、国内招待講演1 件、海外提携学会招待講演5 件、全体シンポジウム1 件、特別シンポジウム（グローバル人材育成）1 件、支部企画シンポジウム1 件、AILA East Asia シンポジウム1 件、AILA EBIC シンポジウム1 件、特別委員会報告2 件、研究発表78 件（内、学生枠9 件、提携学会招待者枠1 件、AILA 枠6 件）、

実践報告26件、シンポジウム14件、ワークショップ7件、賛助会員発表7件、ポスターセッション10件、特別企画ポスターセッション(グローバル人材育成)37件、研究会ポスターセッション30件、合計226件であった。また、賛助会員による展示は40社(59スペース)であった。

(文責 馬場千秋)

.....

【大学英語教育学会 第55回 (2016年度) 国際大会】

大学英語教育学会第55回 (2016年度)
国際大会

The JACET 55th (2016)
International Convention

開催期間：2016年9月1日(木)、2日(金)、3日(土)

開催校：北星学園大学

住 所：〒004-8631 札幌市厚別区大谷地西2-3-1

大会テーマ：ボーダレス時代における英語教育をデザインする

Designing English Education in a Borderless Era

講演者：

Nina Spada氏 (Prof. of University of Toronto)

専門分野：Applied Linguistics, Second Language Education & Multilingualism Research Methodologies and Practices (including Measurement, Evaluation, Assessment, & Knowledge Mobilization)

Kaye Chon氏 (Prof. of Hong Kong Polytechnic University)

専門分野：Hospitality and Services Management, Marketing, Convention Tourism

投野由紀夫氏 (東京外国語大学大学院教授)

専門分野：Corpus Linguistics, Corpus-Based Second Language Acquisition, L2 Dictionary User Research, L2 Vocabulary Acquisition,

L2 Lexicography, Applications of Corpora for Language Learning & Teaching

主旨：

これまで私達が直面する課題を解決するために、多くの指導法が開発され、実践されてきた。また、ボーダレス時代における英語運用能力の必要性の高まりを背景にして、多くの研究がなされてきており、指導法や指導技術がどれほど効果的であるか、学生をどのように評価するのか、どのような教材が用いられるべきかが調べられてきた。実際の授業の場面においても、私達はこの必要性に応じて対処しなければいけないし、第二言語学習に対する多様な期待を裏切らないために処置を講じていかなければいけない。

大学英語教育学会第55回(2016年度)国際大会では、小学校から大学までの英語教育の新たな展望や取り組みに関して、教育法、教材開発、そして、評価という三つのテーマを中心に俯瞰的に議論し、それら革新的なアプローチについて第二言語習得理論から考察を加える。また、グローバル化と多言語社会を背景にした学際的な研究が進む中、時代に対応した新たな指導法、言語と教科内容(コンテンツ)の統合をどのようにデザインし実施していくかを考察する。本大会では、このボーダレス時代におけるクラスルーム内外の英語教育全般を視野に入れた議論の場とし、いかに大学教育に応用できるのかを探求したい。

Many pedagogical approaches have been developed and implemented to cope with the teaching challenges we face. Much research has been conducted to investigate what approaches or techniques are effective, how students are evaluated, and/or what resources are to be directed towards the growing needs for English competency in a borderless era. From the practitioner's viewpoint, we are faced with the issues of how to work with an ever increasing number of diverse needs and with students who often approach second language learning with vastly different expectations.

The JACET 55th (2016) International Convention will comprehensively discuss new perspectives and initiatives for English education

from the primary to college levels centering on the three themes of pedagogy, materials development, and evaluation. We will examine these innovative approaches from the viewpoint of second language acquisition theory. While progressing with interdisciplinary research in the context of globalization and plurilingual environments, we will also explore how to design and implement new pedagogical methods adapted to the globalized era and the integrated teaching of language and contents. The JACET 55th (2016) International Convention will offer opportunities for discussion on all levels of English education for the classroom and beyond in this borderless era and investigate how insights gained from such research and discussion can be applied to tertiary education.

2015年度JACET賞

JACET賞選考委員会は昨年度10月に審査を開始し、学術出版部門1件、新人論文部門1件を2015年度JACET賞候補とし、本年5月理事会において本年受賞者として決定いたしました。また、第54回(2015年度)国際大会において大学英語教育学会新人発表部門1件が選出され、以上の計3件について8月30日に同大会において授賞式が挙行されました。

受賞者と対象になった業績は以下の通りです。受賞者の皆様には心よりお慶び申し上げます。

学術出版部門

業績名：『英語学力の経年変化に関する研究―項目応答理論を用いた事後的等化法による共通尺度化―』(風間書房、2014年2月20日発行)

受賞者：齊田智里氏(横浜国立大学)

授賞理由：英語学力の14年にわたる経年変化を20万人以上のデータで実証した数多くの英語教育の研究の中でも非常に優れた研究のひとつであり、特に、英語学力の低下の裏付けを学習指導要領の改訂に結び付けて行ったことは、今後の日本の英語教育改革に大きな示唆を与えることが期待される。

新人論文部門

業績名：Transcription and Proof-listening: Investigating Effective Speech Reflection

受賞者：加藤由崇氏(京都大学大学院生)

授賞理由：『大学英語教育学会賞規程』第3条7項により、本論文は、第53回(2014年度)国際大会の学生会員発表枠で発表し、Selected Papers Vol.2に投稿し、選考の結果掲載が決定したため。なお、加藤氏は昨年度の新人発表部門受賞者である。

新人発表部門

受賞者：峰松和子氏(津田塾大学大学院生)

対象業績：研究発表“Peer Presentation Activities in the EFL Classroom: Cognitive Apprenticeship in a Community of Practice”(2015年8月29日発表)

授賞理由：The purpose of her study is to examine whether or not implementation of peer presentation activities can help make the EFL classroom a community of practice in which cognitive apprenticeship occurs. There are several reasons why we appreciate her presentation. Her research was properly carried out with well organized, data collection and data analysis. Besides, her English presentation skills were excellent. Above all, we have a high opinion of her research because of her deep understanding of undoubtedly difficult concepts such as a community of practice and cognitive apprenticeship. We believe that she could realize a community of practice in classroom and let the students engage in cognitive apprenticeship using peer presentation activities. These concepts are not quite familiar to English teachers in Japan. We hope that she will disseminate these learning theories to them through her research so that learning becomes situated, strategic, and social and that Japanese students will be able to know that learning is not just the acquisition of knowledge but a social practice.

(JACET賞運営委員会)

本部だより

代表幹事 上田倫史（駒澤大学）

今年の国際大会も、前年に引き続き天候不順に見舞われましたが、多くの会員の皆様にご参加いただき、ありがとうございました。また、九州・沖縄支部の皆様のご尽力にも心よりお礼申し上げます。

本部からは6月21日に行われました社員総会議事録、8月31日に行われました会員総会議事録、平成26年度事業状況報告書、収支計算書、財産目録、監事監査報告書をお知らせいたします。

一般社団法人 大学英語教育学会 平成27（2015）年度定時社員総会議事録

日 時：平成27年6月21日（日）

13時30分～15時00分

会議場：早稲田大学早稲田キャンパス11号館

4階第4会議室

（東京都新宿区西早稲田1-6-1）

総社員数：85名

出席社員数：74名

内訳 本人出席 29名

委任状出席 45名

よって『定款』第18条および第20条の規定の定足数以上を充足

（*第18条および第20条による過半数は43名）

陪席者：4名

議 長：上田倫史

議事録署名人：下山幸成、内藤永

議事録作成者：上田倫史

I. 開会

河野円総務担当理事より、定款所定の定足数を満たした旨の報告があり、社員総会の開会が宣言された。

II. 会長挨拶

神保尚武会長より、任期満了に伴う役員の選出等、いろいろな案件があるので慎重に審議をお願いしたいとの挨拶があった。

III. 議長選出

河野円総務担当理事が議長の選出について諮ったところ、議長に上田倫史氏が選出された。

IV. 議事録署名人選出

議長が議案審議に先立ち、議長の他の議事録署名人2名について、下山幸成氏と内藤永氏の両名を指名したい旨を述べたところ、異議なく可決された。

V. 審議案件

第1号議案 会員異動状況報告の件

河野円総務担当理事より、平成26（2014）年度会員異動状況について報告があり、可決された。

第2号議案 平成26（2014）年度事業報告・収支決算の件

1. 平成26（2014）年度事業報告

河野円総務担当理事より、平成26（2014）年度事業報告の説明があり、下記1～6号事業がすべて可決された。

(1) 1号事業 大学英語教育及び言語教育関連の研究理論の発表及びその実践結果の報告のための大会、セミナー等の開催

(2) 2号事業 紀要、学会誌等の出版物の刊行

(3) 3号事業 大学英語教育に係る国内外の研究者・学術団体・諸機関の実践活動に対する表彰

(4) 4号事業 大学英語教育に係る国内外の研究者・学術団体・諸機関との協力

(5) 5号事業 大学英語教育及び言語教育関連の理論及びその実践方法に関する調査・研究

(6) 6号事業 その他のこの法人の目的を達成するために必要な事業

2. 平成26（2014）年度決算

駒田誠監事より、平成26（2014）年度の決算報告があり、可決された。また、可決された平成27年3月31日現在の正味財産額に基づいて、公益目的財産額の確定を行い、内閣府へ提出することが可決された。

3. 平成26（2014）年度その他報告

河野円総務担当理事より、平成26（2014）年度に交わされた契約、当学会の後援、共催、協賛

名義使用の許可を行った事業、その他販売書籍に関して報告があり、可決された。

4. 公益目的支出計画実施報告

駒田誠監事より、公益目的支出計画の平成26(2014)年度実施報告書案が提示された。公益目的支出計画は、予定どおり行われ、差異に関しても今後の計画実施に影響がなく、計画通り、平成29(2017)年3月31日に終了する旨の説明があり、可決された。

5. 監事監査報告

見上晃監事および駒田誠監事より、平成26(2014)年度の事業監査および会計監査に関して、適正であった旨報告があり、可決された。

6. 公益目的支出計画実施報告書に関する監査報告

見上晃監事および駒田誠監事より、公益目的支出計画実施状況の調査および公益目的支出計画実施報告書を検討した結果、同報告書は、その実施状況に対して適正である旨の報告があり、可決された。

第3号議案 役員選任の件

議長が、任期満了役員の選出方法について諮ったところ、神保尚武会長に役員候補者案の推薦を求める旨の発言があり、全員が異議なくこれに賛成した。

議長が神保尚武会長に役員候補者を推薦するよう求めたところ、神保尚武会長より理事20名、監事2名の候補者を、下記のとおり提案があり、これを各々諮ったところ、満場一致をもって可決選任された。

理事	浅川 和也 (重任)
理事	岩井 千秋 (就任)
理事	大森 裕實 (重任)
理事	小栗 裕子 (就任)
理事	尾関 直子 (重任)
理事	小田 眞幸 (就任)
理事	河野 円 (重任)
理事	木村 松雄 (重任)
理事	佐野 富士子(就任)
理事	志水 俊広 (就任)
理事	鈴木 達也 (就任)
理事	高橋 潔 (就任)

理事	田地野 彰 (就任)
理事	寺内 一 (重任)
理事	富田 かおる(就任)
理事	内藤 永 (就任)
理事	野口 ジュディー津多江 (重任)
理事	樋口 晶彦 (重任)
理事	松岡 博信 (重任)
理事	横山 吉樹 (就任)
計	20名
監事	駒田 誠 (重任)
監事	笹島 茂 (就任)
計	2名

また、議長が、選任された理事20名と監事2名に、役員就任について就任承諾の有無を尋ねたところ、その場に出席していた岩井千秋氏、大森裕實氏、小栗裕子氏、尾関直子氏、小田眞幸氏、河野円氏、木村松雄氏、佐野富士子氏、志水俊広氏、高橋潔氏、田地野彰氏、寺内一氏、富田かおる氏、内藤永氏、野口ジュディー津多江氏、樋口晶彦氏、横山吉樹氏、および、陪席していた鈴木達也氏は理事就任を承諾し、駒田誠氏および笹島茂氏は、監事就任を各々承諾した。

また、本日欠席の浅川和也氏、松岡博信氏から提出された就任承諾書が、神保尚武会長より議長に提出された。これをもって選任された役員が全員、就任を承諾したことを確認した。

なお、これらの役員の任期は、平成29年6月の定時社員総会までであることが確認された。

本社員総会で任期満了退任の役員は、神保尚武理事、中野美知子理事、木村博是理事、山内ひさ子理事、笹島茂理事、河合靖理事、小嶋英夫理事、大石晴美理事、梅咲敦子理事および見上晃監事である。

VI. 報告

1. 平成27(2015)年度事業計画および収支予算

河野円総務担当理事より、平成27(2015)年度の事業計画および人事について説明があった。また、駒田誠監事より、事業計画に基づいた収支予算について説明があった。

2. 現行規程等報告

河野円総務担当理事より、平成26(2014)年度中に改正が行われた規程、ガイドライン等について報告があった。

Ⅶ. 閉会

以上をもって一般社団法人大学英語教育学会定時社員総会の議事を終了したので、議長は閉会を宣言した。

上記の決議を明確にするため、議長(議事録作成者)及び議事録署名人は、次に署名押印する。

平成27(2015)年6月21日

一般社団法人大学英語教育学会
平成27(2015)年度定時社員総会
議 長 上田倫史
議事録署名人 下山幸成
議事録署名人 内藤永
以上

2015年度 一般社団法人大学英語教育学会 会員総会議事録

日 時：2015年8月31日(月) 13:00 - 13:20
場 所：鹿児島大学共通教育棟1号館111教室
司 会：上田倫史(代表幹事)
書 記：内藤永(副代表幹事)

I. 開会

司会の上田倫史代表幹事により会員総会の開会が宣言された。

Ⅱ. 会長挨拶

寺内一会长より、「昨年度の活動、会計、及び今年度の活動計画の説明をさせていただきたい」旨の挨拶があった。

Ⅲ. 報告

1. 総務関係

河野円総務担当理事より、資料に基づき、2015年度会員状況報告、JACET創立以来の会員数、2014年度活動報告、2015年度活動計画に関する説明があった。

また、平成27年3月31日にJACETに貢献された以下の方々に感謝状が送付されたとの報告があった。(敬称略)

原田園子	2006/4/1-2012/3/31 (理事)
石田雅近	2003/4/1-2006/3/31 (理事)
	2006/4/1-2008/3/31 (関東支部長)
神保尚武	2000/4/1-2005/3/31、
	2008/4/1-2015/6/21 (理事)
	2005/4/1-2008/3/31 (副会長)
木村博是	2008/4/1-2010/3/31、
	2012/4/1-2015/6/21 (理事)
	2006/4/1-2010/3/31 (関西支部長)
中野美知子	2004/4/1-2015/6/21 (理事)
	2008/4/1-2012/3/31 (関東支部長)
高橋恒一	2010/4/1-2013/6/23 (理事)
山口光	2010/4/1-2013/6/23 (理事)
	計 7名

2. 財務関係

浅川和也財務担当理事より、資料に基づき、2014年度決算報告、公益目的支出計画実施報告、2015年度予算に関する説明があった。

また、監事監査報告および公益目的支出計画実施報告書に関する監査報告があり、業務および会計に関して適正に運営されている旨報告があった。

3. 役員関係

河野円総務担当理事より、資料に基づき、2015年6月21日に改選された役員(理事・監事)および2015年度委員に関する説明があった。

資料訂正：33頁

誤) 名誉委会長・顧問・支部長・幹事等

正) 名誉会長・顧問・支部長・幹事等

Ⅳ. 閉会

以上をもって一般社団法人大学英語教育学会会員総会の議事を終了したので、司会は閉会を宣言した。

一般社団法人大学英語教育学会 平成26(2014)年度事業状況報告書

定款第5条第1項の(1)から(6)に掲げる平成26年度の事業計画実施概要の報告は下記の通りです。

記

1号事業報告：大会セミナー等事業

(1) 第53回(2014年度)国際大会の開催

平成26年8月28日から30日まで広島市立大学(広島県広島市安佐南区)において、「平和と友好をめざす英語コミュニケーション力の育成」をテーマに第53回(2014年度)国際大会を開催した。参加者数約800人。基調講演2件、海外提携学会代表による招待講演6件、国内招待講演3件、全体シンポジウム1件、賛助会員特別シンポジウム1件、特別委員会報告3件、特別委員会中間報告ポスターセッション1件、運営委員会ポスターセッション1件、中国・四国支部企画シンポジウム1件が行われた。さらに、グローバル人材育成シンポジウム1件、グローバル人材育成特別企画ポスターセッション46件が行われた。その他、研究発表、実践報告、事例研究、シンポジウム、ポスターセッション、ワークショップの分野で発表が行われた。

会員には、12月に刊行した『JACET通信』192号にて全体報告と、基調講演、招待講演、全体シンポジウム、支部企画、特別企画の報告を行った。『JACET通信』192号は学会ホームページに掲載された。後援名義許可をいただいた文部科学省、広島市立大学、広島県教育委員会、広島市教育委員会、広島観光コンベンションビューローに事業実績、決算報告を行った。

(2) サマーセミナーの開催

平成26年8月18日から21日に草津スカイランドホテル(群馬県吾妻郡草津町)において参加者54名でJACET第41回(2014年度)サマーセミナーを行った。“CLIL and Content-based Language Teaching: New global perspectives on bilingualism and immersion”(CLILと内容基盤型言語教育: グローバルの視点からのバイリンガル

とイメージ)のテーマのもと、講師にRoy Lyster氏、池田真氏、Carol Inugai-Dixon氏を迎え、公募による参加者の発表も行った。活発な論議が展開され、参加者からも好評であった。講演および発表内容をプロシーディングとしてまとめて刊行した。

(3) 英語教育セミナーの開催

平成26年12月6日に愛知大学(名古屋校舎)において、JACET第2回(2014年度)英語教育セミナーが「小中高大連携の現状と課題」をテーマに開催された。岡田伸夫氏の「教育における縦と横の連携—英語教育の連携を中心に」という演題の基調講演とともに、TOEIC 三橋峰夫氏(R&D 主席研究員)、英検塩崎修健氏(教育事業部長代理)、Benesse小田切一弘氏(高大接続課)らによる「英語資格(検定)試験を活かす」をテーマとした講座I、磐崎弘貞氏(筑波大学教授)による「学習英語辞典を活かす」エラーから見る高頻度語義バイアスと文脈の収束性という講座II、および賛助会員5社(三修社、金星堂、ピアソン、チエル、NEC)による「出版社教材を活かす」をテーマとした講座IIIが開催された。さらに、「小中高大連携を基盤にしたグローバル人材育成に寄与する大学英語教育の展望」というタイトルでパネルディスカッションを開催し、Panelists: 山下敦子氏(岐阜市立鶉小学校教頭)、熊谷紀孝氏(愛知県立田口高等学校教諭)、太田光春氏(文部科学省視学官)、宮浦国江氏(愛知県立大学教授/教養教育センター長)、Moderator: 大森裕實氏(愛知県立大学教授/JACET理事)らをパネリストとして迎え活発な議論が交わされた。小学、中学、高校、大学等の英語教員、および英語教育関係者約90名が集まり、講演、質疑応答、討議を通じて、英語教育における小中高大連携の実態を正確に把握することのできる充実した内容を展開し、グローバル人材育成に重要な役割を担う大学英語教育の改善と発展に寄与することができた。

(4) 支部大会の開催

以下のように各地で支部大会を開催した。支部大会で披露された研究成果や知見が各研究者の研究活動に大きな道標となった。また、研究大会については、各支部ニューズレターで報告された。

- ・北海道支部大会 平成26年6月28日
- ・東北支部大会 平成26年7月6日

- ・関東支部大会 平成26年6月29日
- ・中部支部大会 平成26年6月7日
- ・関西支部大会（春季）平成26年6月14日、
（秋季）11月29日
- ・中国・四国支部大会 平成26年6月7日
- ・九州・沖縄大会 平成26年7月5日

(5) 支部講演会の開催

以下のように、各支部において講演会が開催された。講演会で披露された研究成果や知見が各研究者の研究活動の大きな道標となった。

- ・関東支部講演会
平成26年4月12日、9月20日、10月11日、
12月13日、平成27年1月10日
- ・関西支部1～3回講演会
平成26年7月5日、10月18日、平成27年
3月7日
- ・九州・沖縄支部学術講演会
（春期）平成26年7月5日、（秋期）11月22日

(6) 支部研究会等の開催

以下のように各支部において研究会が開催され、これらの研究会で披露された研究成果や知見が各研究者の研究活動の大きな道標となった。

- ・北海道支部研究会
平成26年5月31日、11月8日、平成27年
3月7日
- ・東北支部例会
平成26年11月30日
- ・関東支部月例研究会
平成26年5月10日、7月12日、11月8日
- ・中部支部
平成26年10月11日、平成27年2月28日
- ・中国・四国地区大学間連携イベント大学生 Oral
Presentation & Performance (OPP) 研究会
平成26年12月14日

2号事業報告：出版物刊行事業

(1) 『紀要』の刊行

①平成27年1月30日に『JACET Journal』59号を刊行。掲載論文 10件。

会員より応募された論文、リサーチ・ノート、及びブックレビューの3つの分野における論文を厳正に審査し、掲載、非掲載を決定した。それぞれ会員及び英語教育関係者、及び国立国会図書館、国立情報学研究所へ送付した。海外提携学会等へ

も送付し、日本の英語教育研究の最新情報を発信した。

(2) 『Selected Papers』の発行

平成26年12月25日『JACET International Convention Selected Papers』1号を発行

国際大会で口頭発表（一般ポスター発表も含む）した発表者の学術研究を奨励し、論文発表の機会を与え、また海外の学会や英語教育関係者に日本の研究をリアルタイムで発信するため、電子ジャーナル（オンライン）として発行した。内容はInvited Papers 3編（Susan Bassnett氏、Ken Hyland氏、Alan Hirvela氏）Selected Papers 4編、全投稿数20編であった。また、2号発行のために、発行スケジュールを決定した。JACETウェブサイト上にSubmission Guidelinesとテンプレートを掲載するとともに、投稿原稿の記録と査読者割りの簡便化を図るため、オンラインフォームを作成し、投稿を受け付けた。選考委員会に投稿された原稿の査読を依頼しており、2号は平成27年8月中旬発行予定である。

(3) 『JACET 通信』の刊行

- ①平成26年7月1日に『JACET 通信』191号（日本語、ウェブ版）を刊行。
- ②平成26年12月1日に『JACET 通信』192号（日本語、印刷版およびウェブ版）を刊行。
- ③平成27年3月1日に『JACET 通信』193号（英語、ウェブ版）を刊行。

以上、合計3回の通信の刊行を行い、大学英語教育関連の情報発信に寄与した。学会の最近の動向や優秀な大学英語教育を紹介することにより、会員の大学英語教員としての意識を向上させることができた。また、国内の他学会からの寄稿により、学際的な教育や研究の動向を知ることができた。

(4) 支部紀要の発行

各支部で紀要を発行し、会員及び英語教育関係者等へ送付した。支部紀要は、支部会員の学術研究を奨励し、論文発表の機会を与えた。また、日本の英語教育研究の最新情報を発信した。

- ・『北海道支部紀要Research Bulletin of English Teaching No.12』
平成27年3月10日
- ・『関東支部紀要』2号
平成27年3月31日

- ・『中部支部紀要』12号
平成26年12月20日
 - ・『JACET関西支部紀要』17号
平成27年3月31日
 - ・『大学英語教育学会中国・四国支部紀要』12号
平成27年3月31日
 - ・『Annual Review of English Learning and Teaching』19号
平成26年11月30日
- (5) 支部ニュースレターの発行
各支部でニュースレターを発行し、支部活動動向や、支部会員への英語教育に関する情報提供と情報交換を行った。
- ・JACET東北支部通信41号
平成27年3月31日
 - ・関東支部ニュースレター3・4号
平成26年10月8日、平成27年3月31日
 - ・JACET Chubu Newsletter No.32・33
平成26年5月10日、12月20日
 - ・関西支部ニュースレター68・69・70号
平成26年5月1日、7月26日、10月18日
 - ・中国・四国支部ニュースレター13・14号
平成26年9月30日、平成27年1月31日
 - ・九州・沖縄支部ニュースレター30号
平成26年4月15日

3号事業報告：表彰事業

(1) 大学英語教育学会賞の表彰

第53回（2014年度）国際大会の最終日（平成26年8月30日）に英語教育における研究または実践上の顕著な業績を通してわが国における大学英語教育の改善と進歩・発展に寄与した本学会員である個人または団体に対して表彰を行った。受賞者に対しては賞状とともに記念品を贈呈した。
平成26年度大学英語教育学会賞

学術出版部門

受賞者：大津由紀雄氏（明海大学）、鳥飼玖美子氏（立教大学）、岡田伸夫氏（関西外国語大学）、田地野彰氏（京都大学）

対象業績：『学習英文法を見直したい』（研究社、2012年7月発行）

実践部門

受賞者：吉村俊子氏（花園大学）、安田 優氏（北

陸大学）、石本哲子氏（大谷大学）、齋藤安以子氏（摂南大学）、坂本輝世氏（京都大学大学院生）、幸重美津子氏（京都外国語大学）、野口ジュディー氏（武庫川女子大学）、森永弘司氏（同志社大学）、竹村理世氏（同志社大学）、松岡信哉氏（龍谷大学）、田中敦子氏（関西外国語大学）、Pavloska、Susan氏（同志社大学）、藤澤良行氏（大阪樟蔭女子大学）、多田稔氏
対象業績：『文学教材実践ハンドブック—英語教育を活性化する—』（英宝社、2013年9月30日発行）

新人発表部門

受賞者：加藤由崇氏（京都大学大学院生）

対象業績：研究発表“Helping Learners to Improve Their Speaking Skills: How Should We Encourage Them to Reflect on Their Own Speech?”（大学英語教育学会第53回（2014年度）国際大会 2014年8月28日発表）

4号事業報告：協力事業

(1) 関係学術団体への派遣

①KATE (The Korea Association of Teachers of English)

平成26年7月4日から5日に大韓民国で開催されたKATE 2014 International Conferenceに本学会より学会代表者1名を派遣し、研究発表を行った。大会参加の成果は学会ウェブサイトに掲載。

②RELC (Regional Language Centre)

平成26年4月14日から16日にシンガポール共和国で開催されたRELC Seminar 2014に本学会より学会代表者1名を派遣し、研究発表を行った。大会参加の成果は学会ウェブサイトに掲載。

③ PKETA (Pan-Korea English Teachers Association)

平成26年10月18日に大韓民国で開催されたPKETA大会に本学会代表者1名を派遣し、研究発表を行った。大会参加の成果は学会ウェブサイトに掲載。

④ALAK (The Applied Linguistics Association of Korea)

平成26年9月27日に大韓民国で開催されたALAK 2014 International Conferenceに本学会より学会代表者1名を派遣し、研究発表を行った。大会参加の成果は学会ウェブサイトに掲載。

⑤ ETA-ROC(English Teachers' Association of Republic of China)

平成26年11月14日から16日に台湾で開催されたThe 23rd International Symposium and Book Fair on English Teachingに本学会より学会代表者1名を派遣し、研究発表を行った。大会参加の成果は学会ウェブサイトに掲載。

⑥ CELEA(Chinese English Language Education Association)

平成26年10月23日から26日に中国において開催されたCELEAの国際大会に学会代表者1名を派遣し、研究発表を行った。大会参加の成果は学会ウェブサイトに掲載。また今回はAILA-East Asiaのシンポジウムが開催されるため、会長も派遣した。

⑦ Thai TESOL(Thailand TESOL)

平成27年1月29日から31日にタイ王国で開催された第35回Thai TESOL国際大会に本学会代表者1名を派遣し、研究発表を行った。大会参加の成果は学会ウェブサイトに掲載。

⑧ AILA (Association Internationale de Linguistique Appliquée)

平成26年8月10日から15日にオーストラリアにて開催されたAILAのEBIC business meetingに山内ひさ子副会長を代表者として派遣した。EB会議への参加を含む、AILA大会において学術交流および情報交換を活発にして研究活動を促進するよう努めた。大会参加の成果は報告書として理事会に別途提出済みである。

⑨ MELTA (Malaysian English Language Teaching Association)

平成26年8月28日から30日にマレーシアで開催された23rd MELTA INTERNATIONAL CONFERENCE (& 12th AsiaTEFL International Conference)に本学会より学会代表者1名を派遣し、研究発表を行った。大会参加の成果は学会ウェブサイトに掲載。

(2) 提携学会からの代表者受け入れ

第53回(2014年度)国際大会および支部大会において提携学会からの代表者を受け入れ、招待講演に係る手配やアテンドを行い友好的な関係を促進した。

(3) 提携学会派遣代表者とビジネスミーティング

大学英語教育学会の提携学会からの代表者と第

53回(2014年度)国際大会中(平成26年8月29日)に情報交換と今後の協力体制について話し合った。結果は運営会議にて報告した。

5号事業報告：調査研究事業

(1) 基本語改訂

基本語改訂のための会議を計4回開催し、改訂作業を行った。

(2) ICT調査研究

①シンポジウムの開催

平成26年8月28日に第53回(2014年度)国際大会においてJACET-ICT調査研究特別委員会特別企画としてシンポジウムを開催した。全国で行われているICTを活用した語学授業実践の最前線について発表し、情報を交換した。

②講演会の開催

平成26年12月19日に早稲田大学で、次世代e-Learning Forumを開催し、全国会員に向け講習会・講演会を行った。本講演会の成果は、報告書に掲載する。

③報告書の発刊

平成26年の活動と調査を報告書にまとめるとともに、論文や事例報告としてまとめ、会員が参考にできるようにした。

(3) グローバル人材育成

①国際大会特別企画ポスタープレゼンテーション

平成26年8月28日から8月30日の3日間開催された第53回(2014年度)国際大会において、「グローバル人材育成のための大学英語教育の取り組み『第2弾』」としてポスタープレゼンテーション(第1分野：到達目標とその評価；第2分野：留学生派遣プログラム)を企画した。第1分野のポスタープレゼンテーションにおいては、グローバル人材育成のための大学英語教育の取り組みの中で、特に、「到達目標とその評価」に焦点を絞った取り組みの紹介を行った。また第2分野のポスタープレゼンテーションにおいては、留学生の派遣について先駆的な活動を行っている組織の取り組みの紹介を行った。第1分野16件と第2分野30件のポスターは『報告書(紙版とPDF版)』として文部科学省高等教育局に提出した。

②2年間計画

5つの提案を具体的に実施するまでの筋道と方法論まで含んだ提案書を「外部試験大学実態調査」

(第1班)、と「外部試験調査」(第2班)のそれぞれの担当班が作り上げ、国際大会においてグローバルポスターセッションと実用英語検定、IIBC、CIEEの外部試験3団体との特別シンポジウムの開催という形式で発表した。また、国際大会特別企画のグローバルポスターを含んだ形で『中間報告書(紙版とPDF版)』を作成し、文部科学省高等教育局に提出した。JACETのウェブサイトにも各報告書(個人情報を除いたもの)を公開し、会員だけでなく社会に広く知らせて、本研究結果が利用できるようにした。

(4) 専門分野別の研究会活動

42の研究会がそれぞれの分野での調査研究を基盤として、会員の資質向上、書籍出版、教材開発、紀要等での論文発表などの活動を行った。それにより、大学英語教育の発展に寄与し、会員相互の専門知識と技能の向上、会員の知見による学術の発展及び社会への還元を行った。また、各研究会の研究成果物を可能な限り公開できるように、そのための整理を行った。

6号事業報告：その他 法人事業

(1) 諸会議の開催

- ①平成26年5月25日 平成26年度第1回理事会
- ②平成26年6月22日 平成26年度第2回理事会
- ③平成26年6月22日 平成26年度第1回定時社員総会
- ④平成26年8月27日 平成26年度第3回理事会
- ⑤平成26年12月21日 平成26年度第4回理事会
- ⑥平成27年3月21日 平成26年度第5回理事会

(2) その他の委員会の開催

定例の各運営委員会、運営会議、顧問会議、支部委員会、支部役員会を適宜行った。

(3) 会員総会の開催

平成26年8月28日に会員総会を行った。平成25年度事業報告および平成26年度活動状況の報告、社員選挙に関する説明を会員に行い、意見交換を行った。

(4) 『会員名簿』の刊行

会員情報の提供、定款等規則の開示を目的として『一般社団法人大学英語教育学会(JACET)会員名簿』を平成26年12月1日に発行した。

(5) 社員選挙の実施

平成26年10月から平成27年1月にかけて『社員選挙規程』に則り立候補および他薦を応募し、候補者を選出。候補者公示の後、異議申し立て期間を設置し、社員選挙を実施した。平成27年4月1日から平成29年3月31日までの社員85名を選挙した。

以上

一般社団法人 大学英語教育学会
平成26年度収支計算書

(平成26年4月1日から平成27年3月31日まで)

(単位：円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 異
I 事業活動収支の部			
1. 事業活動収入			
①基本財産運用収入			
基本財産利息収入	40,000	122,762	△ 82,762
②入会金収入			
入会金収入	200,000	221,000	△ 21,000
③会費収入			
一般会員会費収入	21,429,000	20,198,000	1,231,000
学生会員会費収入	1,000,000	680,000	320,000
維持会員会費収入	221,000	195,000	26,000
賛助会員会費収入	1,950,000	1,830,000	120,000
団体会員会費収入	640,000	640,000	0
会費収入計	25,240,000	23,543,000	1,697,000
④事業収入			
展示・広告収入	2,889,500	3,158,000	△ 268,500
参加費収入	8,212,500	6,624,038	1,588,462
書籍販売収入	2,300,000	1,656,584	643,416
雑収入	1,990,000	917,000	1,073,000
事業収入計	15,392,000	12,355,622	3,036,378
⑤寄付金収入			
寄付金収入	800,000	1,750,000	△ 950,000
⑥雑収入			
受取利息収入	1,500	1,633	△ 133
広告収入	350,000	150,000	200,000
雑収入計	351,500	151,633	199,867
事業活動収入計	42,023,500	38,144,017	3,879,483
2. 事業活動支出			
①事業費支出			
印刷製本支出	4,772,678	4,243,488	529,190
給料手当支出	1,766,666	1,771,343	△ 4,677
臨時雇賃金支出	1,753,000	1,402,290	350,710
賞与支出	233,334	233,334	0
退職給付支出	0	256,000	△ 256,000
旅費交通費支出	5,208,000	3,739,237	1,468,763
通信運搬費支出	1,913,500	1,903,029	10,471
消耗什器備品費支出	1,208,512	1,224,864	△ 16,352
会議費支出	4,452,940	3,705,887	747,053
諸謝金支出	948,370	963,903	△ 15,533
負担金支出	160,000	158,760	1,240
図書研究費支出	1,070,000	1,210,619	△ 140,619
事業費支出計	23,487,000	20,812,754	2,674,246
②管理費支出			
給料手当支出	4,634,166	5,206,845	△ 572,679
賞与支出	729,434	729,434	0
臨時雇賃金	26,000	0	26,000
退職給付支出	0	420,000	△ 420,000
法定福利費支出	650,000	680,800	△ 30,800
会議費支出	344,400	230,060	114,340
旅費交通費支出	2,907,600	3,035,258	△ 127,658
通信運搬費支出	1,832,000	2,158,415	△ 326,415
消耗什器備品費支出	929,900	485,889	444,011
修繕費支出	20,000	41,040	△ 21,040
印刷製本費支出	1,034,000	926,467	107,533
支払手数料支出	1,450,000	1,354,600	95,400
光熱水料費支出	190,000	171,952	18,048
賃借料支出	2,465,640	2,441,820	23,820
諸謝金支出	150,000	86,506	63,494
租税公課支出	4,000	0	4,000
負担金支出	60,000	60,000	0
図書研究費支出	10,000	4,305	5,695
雑支出	189,000	141,170	47,830
管理費支出計	17,626,140	18,174,561	△ 548,421
③その他の支出			
法人税、住民税及び事業税	100,000	70,000	30,000
事業活動支出計	41,213,140	39,057,315	2,155,825
事業活動収支差額	810,360	△ 913,298	1,723,658
II 投資活動収支の部			
1. 投資活動収入			
投資活動収入計	0	0	0
2. 投資活動支出			
①その他の支出			
投資活動支出計	156,000	0	156,000
投資活動収支差額	△ 156,000	0	△ 156,000
III 財務活動収支の部			
1. 財務活動収入			
財務活動収入計	0	0	0
2. 財務活動支出			
財務活動支出計	0	0	0
財務活動収支差額	0	0	0
IV 予備費支出			
予備費支出	0	-	0
当期収支差額	654,360	△ 913,298	1,567,658
前期繰越収支差額	9,549,011	9,549,011	0
次期繰越収支差額	10,203,371	8,635,713	1,567,658

財 産 目 録

平成27年3月31日現在

(単位：円)

貸借対照表科目	場所・物量等	使用目的等	金額
(流動資産)			
現金			248,096
普通預金			8,060,062
定期預金			834,859
未収金			20,000
たな卸資産			1,062,930
流動資産合計			10,225,947
(固定資産)			
基本財産			
定期預金			20,000,000
その他固定資産			
什器備品			2
敷金			963,900
固定資産合計			20,963,902
資産合計			31,189,849
(流動負債)			
未払費用			405,300
未払法人税等			70,000
預り金			51,997
流動負債合計			527,297
固定負債合計			0
負債合計			527,297
正味財産			30,662,552

監事監査報告書

一般社団法人大学英語教育学会
会長（代表理事） 神保 尚武 殿

私たち監事は、一般社団法人大学英語教育学会の平成 26 年 4 月 1 日から平成 27 年 3 月 31 日までの業務に関して、監査を実施しました。その結果について、次のとおり報告いたします。

1. 監査の概要

私たち監事は理事会に出席するほか、理事および法人の関係者から事業の執行状況について聴取し、業務について監査を実施しました。

また、当該事業年度に係る貸借対照表ならび正味財産増減計算書、およびその附属明細書について監査を実施しました。

2. 監査の結果

(1) 業務監査の結果

法人の業務について、法令、定款および規則等に従い、適正に運営されているものと認めます。


(2) 会計監査の結果

貸借対照表ならび正味財産増減計算書、およびその附属明細書は、法人の財産および損益の状況を正しく示しているものと認めます。


平成 27 年 5 月 18 日

一般社団法人 大学英語教育学会

監事

見上 晃 

監事

新田 誠 

『JACET 通信』 創刊の思い出

田中 春美 (南山大学名誉教授、JACET 顧問)

『JACET 創立 50 周年記念誌』その他にも書いたように、私が JACET の活動に参加したのは、1967 年の夏期セミナーに偶然、Ph. D. 論文の指導教官であった W. Nelson Francis ブラウン大学教授が選ばれ、教え子だからお世話をするようにと、頼まれたからであった。この第 1 回セミナーは、米国フルブライト委員会の全面的支援で行われ、募集定員の 2 倍以上の応募者があったが、半数以下にしぼられ、その中に小池生夫氏や松山正男氏などの実力者が含まれていた。日記をつけていなかったもので、詳しくは記憶にないが、1967 年の 7 月 17 日から 8 月 4 日までの 3 週間、Francis 教授は 'Linguistics and the teaching of English' という題で、月曜日から金曜日までの毎朝、集中講義をしてくださった。だいぶ前に亡くなられた Francis 先生には申し訳ないが、時効ということで打ち明けると、確か 2 回目の週末に、2 人で 1 泊して日光を訪ねた折、華嚴の滝の展望台へ行くのを嫌がって、先生が高所恐怖症 (acrophobia) であることを知った思い出がある。

翌年も夏期セミナーは続き、Albert C. Marckwardt プリンストン大学教授が来日され、同じように (ただし 2 週間) 週日午前、29 人の選ばれた参加者を相手に、英語学の集中講義をしてくださった。その後、第 1 回と第 2 回のセミナー参加者の有志が JACET の理事会に提案し、その実現は 1969 年 1 月になったけれども、小池・松山両氏のほか、五十嵐康男氏や私など主に 30 代の大学関係者が中心となって、JACET の研究企画委員会が発足した。当初の活動は、第 3 回夏期セミナーの準備を筆頭に、出版関係や大学英語教育の実態調査などであったが、私は 1 人でコツコツとやるのが好きだったので、『JACET 通信』編集の責任者にしてもらった。この頃の研究企画委員の数は、まだ 10 人前後しかいなかったが、ほとんどの人がご自分の仕事に差しさわりがなかり、JACET の仕事に心血を注ぎ、いわゆる



service and sacrifice の精神に満ちあふれていた。それにあやかっただけではないのだが、私も諸先生方から原稿を集め、自分でも書評やあとがきを書いたものである。

このようにして、わずか 6 ページの『JACET 通信』の創刊号の原稿が集まった。そして、誰からともなく表紙に手書きの飾り絵が出され、前年 (1968 年) 10 月の第 7 回年次大会で辞任が承認された初代会長の朱牟田夏雄先生に代わって、新たに選ばれた小川芳男会長の短いあいさつと署名、会長の交代を審議した理事会の経緯を紹介した星山三郎理事の記事が 1 面を飾った。ところで、この集まった原稿をどこで印刷したかの話に移るが、それにはまず、当時の私自身のことに触れておかなければならない。私は、専門分野ばかりでなくマージャン友達と登山仲間でもあった隈部直光氏 (大妻女子大学名誉教授) の勧めで、すでに数年前から、パーマー (Harold E. Palmer) と縁が深かった語学教育研究所 (The Institute for Research in Language Teaching, 略称 IRLT、語研) の研究員

になっていた。そこで、これも『JACET創立50周年記念誌』に書いたが、忙しい時にはJACETの代表幹事を務めながら、語研の研究者も続け、1972年の秋には、同じ週末に並行して開催された語研とJACETの大会運営委員長を兼ねて、学生時代に勝手知った立教大学の池袋キャンパスを駆け回ったものである。その語研の出版物のほとんどが、東京中野のやや不便なところにあったオリエンタル・プレスで刷られていた関係上、『JACET通信』創刊号もそのままそこで刷られることになった。この関係はその後、『JACET通信』第80号代まで続き、そこで現在のタナカ企画に代わったのである。

ところで、このようにして創刊号は何とか仕上げることができ、内容もそれほど評判は悪くなく、ホッと一息という感じだったが、私自身に大変な問題が起きてきてしまったのである。実は、かつて勤務していた立教大学では、私がブラウン大学に留学した際、最初は1年間だけのつもりだったが、現地でスタッフと話しているうちに、Ph. D. までやってはどうかという話になり、もう1年、さらに資格試験を受けるためにもう半年、合わせて2年半、留学させてもらった経緯があり、その後3年に達しないうちに、もう1つの母校である東京教育大学の言語学科に移籍したため、留学中に頂戴していた給料分を退職金などで返還した、ということがあった。ところで、ブラウン大学での資格試験が通ったあと、残ったのはPh. D. 論文を書き上げて、提出することだった。しかし、張り切って新しい授業を始めた東京教育大学では、学生運動の波が押し寄せ、授業が1年以上できない状態に陥った。論文の作製を前にして、焦りにさいなまれた私は先輩や同僚と相談して、1年間なら留守にしてもよいという言致を得た。こうして休職をして、再度ブラウン大学に留学することになったのが、1969年の夏だったのである。

『JACET通信』の編集責任者になり、創刊号だけは出したものの、その夏には渡米して、別の人に編集をしてもらわなければならなくなったわけだが、幸いなことに交代してくださった北山克彦氏（当時東京商船大学）が、第2号・第3号・第

4号を第3回夏期セミナーと秋の第8回大会を中心に、手際よくまとめてくださり、秋から冬にかけて年内に3つの号を仕上げるといふ、離れ業を見せてくださったのは、旧編集責任者としては望外の喜びであった。その後私は、翌年の秋に東京教育大学に復職し、3年近くそこで教え続け、その間にJACETでは研究企画委員から評議員に昇格した。ただ再び、ハワイの東西センター（EWC）から客員研究員として招かれ、筑波大学への移行の過程で、学生数も激減しつつあった東京教育大学文学部の教授会も出張を認めてくれたので、今度は初めから2年間の予定でハワイに渡り、英語教育関係、特に英語教材の開発を中心とするプログラムを委されたのである。太平洋沿岸の諸国から選ばれた10人に達しない参加者たちが、教授法や教材作製の新しい傾向を、東西センターや隣接するハワイ大学のスタッフから学び、それぞれ帰国して、各自の勤務先に適した英語教材を開発する、という趣旨であった。

誤解のないように申し添えると、東西センターは米国政府直属の研究機関、ハワイ大学はハワイ州の管轄下にあるが、センターはハワイ大学の東端にあり、双方のスタッフの一部は授業・研究の交換や協力を行っている。私が在籍した頃は、特にセンターは全盛時代で、国際キリスト教大学（ICU）におられたEverett Kleinjans教授が所長、日本のブリティッシュ・カウンシル（通称ブリカン）におられたVerner C. Bickley氏、変形文法の解説や論文集で名高いMark Lester教授、演劇教授法のRichard A. Via氏、World Englishes（WE）の提唱者Larry E. Smith氏（2014年12月にWEの学会直前にニューデリーで急死）などがおられた。残念ながら、米国政府の資金不足などが主な原因で、東西センターの現状は、語学教育に関するかぎり、見る影もない。

以上、自分の過去の一部も含めて、反省とともにJACET初期の思い出を語らせていただいたが、これからも永くこの学会が無欲の役員の方々によって支えられ、ますます発展し、社会に貢献することを願いつつ、筆を置く。

[特別寄稿]

北星学園大学短期大学部英文学科における 観光ホスピタリティ教育と英語教育の実践

森越 京子（北星学園大学）

吉田かよ子（北星学園大学）

『JACET通信』2012年7月号に本学科の取組み「ホスピタリティ教育」の導入について寄稿した。それから3年が経ち、これまでの成果を鹿児島で行われたJACET国際大会で発表した。本稿では、これまでの取組みを振り返って報告する。

プログラムの概要

2011年のカリキュラム改訂で「総合講義ホスピタリティ」「ホスピタリティと観光」「インターンシップ」を短大英文学科の専門科目として導入した。観光やホスピタリティというキーワードは、近年の訪日観光客の増加や2020年東京オリンピック・パラリンピック誘致決定に伴い、学生の興味を引いている。

「総合講義ホスピタリティ」は、学外から臨時講師をお招きして、専門的な知識に触れるオムニバス形式の講義を取り入れている。これは英文学科の学生にとって新鮮であり、さまざまな将来の職業の選択肢を知ることができる。

「ホスピタリティと観光」の授業は、年々その取組みが充実してきている。振り返ると、英語で教えるこの講義は、CLILの「4つのC」(Content, Communication, Cognition, Community) を含み、まさにCLILの実践教育の場となった。英語のテキスト内容を読み取ることは、まだまだ、学生にとって大変なタスクであるが、講義の中でわかりやすい具体例を提示し、英語でのディスカッションやアクティビティを取り入れる工夫をしている。この科目では、後半にイベントマネジメントの取組みがある。

インターンシップはヒルトンニセコビレッジで実施し、一部海外でのプログラムを導入した。海外の取組みを2015年度から、「グローバル・インターンシップ」という新科目としてカリキュラ

ムに加えることができた。3年間の実践を通して、現在感じているのは次の点である。

企業・専門家との連携の重要性

企業や専門家と接することが増え、高い専門性や日々変わる観光ホスピタリティ産業の現状を知ることができるようになった。札幌のホテルコンシェルジュからは、「海外のお客様には、Wifi接続・SIMカードの使用方法を英語で説明することが多い」といった具体的な英語使用のニーズを聞いたり、ニセコ地域の外資系の会社では、企業で求めている英語のレベルは、私たちが考えていた以上に高く、日常会話程度では、大切な顧客に十分な対応ができないと指摘された。外国人スタッフを多く雇用するホテルでは、その仕事につくにあたり、日本人にも同等に高い英語コミュニケーションレベルが求められており、ビジネスの厳しさを痛感した。国内にいながら海外からの求職者とポジション獲得時の競争が始まっている。

地域の企業と関わる中で、インターンシップの受け入れ提供や、大学の就職支援課に実際に求人情報を頂く例もあり、大学側にとっても良い連携



香港国際空港にて研修

が持てるようになった。

海外での就業経験のある専門家から、学生にアドバイスをもらうことも多かった。実際に専門家からアドバイスを受けて、タイのホテルに就職を果たした卒業生も現れた。国内で経験を積んで海外で働きたいという学生のキャリアパス実現に向けて、手掛かりが見えてきた。

キャンパスから飛び出して

これまでの自身の英語教育を振り返ると、近年まで、教室内での英語教育に徹していて、そこから社会への広がりが乏しかったことを反省している。もちろん海外語学研修プログラムはあったが、教室内でできることに限られていた。現在は、教室外の活動を通して、学生が実際に英語を使うという経験の有効性を感じている。その準備には、教員側の時間とエネルギーを必要とするが、学生にとって学外での数日の経験でも、教室内にも勝る学びの機会となっているようである。

インターンシップでは、「実際に職場で英語を使ってみて、うまく表現できなかった」、「丁寧に話せなかった」という気付きから、「さらに英語を学びたい」とのモチベーションにつながった。また、「英語で対応したお客様から喜んでもらい、もっと英語力を磨いて、英語で接客の仕事をした」とキャリアと英語を強く意識するようになる学生もいる。

学生コメント：香港キャリア・サクセス・プログラム参加者

空港で働くのが希望だったので、北海道や香港の空港に行って研修できたのは良い経験となりました。英語しか伝わらない人の前で英語プレゼンテーションをしたので緊張したし、すごく大変だと思いました。キャリア・サクセス・プログラムに参加して、空港の案内業務と旅客受託業務を行う会社について知ることができ、実際に就職につながったのでよかったです。いろいろな企業について興味がある人は参加することを勧めます。また、英語に関しては、現地で何とか使いましたが、もっと勉強をしなくてはと思いました。

(2年生 鳴海 楓夏)



香港でのキャリア・サクセス・プログラム（海外インターンシップ）では、日本と香港の国際空港のカスタマーサービスを比較して、香港国際空港(HKIA)の専門職員の前で英語によるプレゼンテーションを行うものであった。準備期間が短いながら、どうにかみな無事に発表を行って、一番安心したのは教員であった。

また、「ホスピタリティと観光」の授業の中でイベントマネジメント実践を取り入れた。海外からのゲストスピーカーを招聘して、学科の公開講座を開くというもので、ゲストスピーカーの迎えから、市内・キャンパスの案内、公開講座の運営、ポスター作成を含む広報、講師の英・日語での略歴の作成、講座当日の司会、機材の調整など、それぞれの担当の仕事にどのように工夫して取り組むかというのが大きなポイントであった。ゲスト案内の学生には、来賓であるゲストとどのように英語で会話をはずませるのか、あらかじめ話すトピックや質問項目を準備させた。ぎこちない部分もあったが、ゲストの皆様の温かいサポートで、学生には貴重な体験となった。英語で司会を務めた学生も、普段あまり使うことのないフォーマルな表現や司会進行の文章を準備するのに苦労したが、事前にステージでのリハーサルを取り入れ、当日に備えた。学生は、「うまくいった」、「うまくいかなかった」との感想があるが、どちらも英語を実際に使うという体験で、自分の英語コミュニケーション力を知り、仕事で英語を使うということの意味を理解することができた。

学生の可能性は未知数

年度によって、また、クラスの規模によって、イベントへの取り組みは違うが、学生自身が担当分野を選択できるようにしている。思ってもみな

かった学生が司会担当を希望したり、素晴らしいデザインでポスターを作成したり、学生それぞれの興味・特技が見えてくる。学生の能力を過小評価してはいけない、どこで予想以上の力を出すかわからない。教員側で学生の学びのリミットを作るのではなく、失敗してもできるところまでやってもらおうという姿勢が大切だと感じるようになった。今年の公開講座は、大変うまく運営されたと思う。もちろん外国人講師の講演の進め方が良かった事はいうまでもないが、学生たちは観光に関する英語の講演を集中して聞き、講師からの問いかけに英語でよく反応していた。講堂で行ったので200人もの学生の前で質問するのは勇気のあることだが、5～6名の学生が英語で質問をした。学生からは、「教員が質問をする“さくら”を準備したのでは」と、考えているものもいたが、実際には、自主的に学生が挙手して、英語で講師に謝辞をのべ、質問をしていた。確かに、2年生に、「ぜひ質問しましょう！」とは声をかけたが、自分で講演内容を理解しそれと関連させて質問をしている学生の姿は素晴らしい。それにつられてか、多くの1年生が質問を始めたのかもしれない。

先輩はロールモデル

短大は修学期間が2年間と短い、1年生が2年になると、学生は急に成長する。教員が学生に話すより、立派になった先輩を見るほうが学生には刺激的である。2年生が企画するイベントを通

して、また、頼りになる2年生を見て、後輩たちは「来年は自分たちもあのようにになりたい」と思ってくれていると感じる。

また、イベントマネージメントの一環として、昨年から、キャンパス説明会の学科説明に、先輩学生から、日々のキャンパスライフ、海外プログラムの経験について英語でプレゼンをしてもらっている。教員が話すより、高校生の目が輝いているのを強く感じる。学生が作るパワーポイントのスライドは視覚的にもセンスが良く、高校生にとっても魅力的な内容である。英語プレゼンテーションの準備をすることは英語パワーポイント作成からスピーチ原稿完成まで、更なる英語学習への取組みとなる。高校生からのコメントも肯定的だ。「短大でどのように英語を勉強していますか」「最初からそんなに英語が話せましたか」などの質問を受けると、学生側の自信や達成感にもつながる。

科研費(基盤研究C)24501167の助成を受けたこれらの取組みは、多くの人との出会い、協力を得て良い成果をもたらした。今後は、学科の専門科目の中で引き継がれる。また、学科では新たなメンバーを迎え、その専門性を活かし「模擬観光ツアー」をこの10月に実施し、英語観光ガイド研修が始動した。これからも、英語を使ったイベントや活動を続け、学生が英語を使って輝ける場を提供していきたい。Shine like stars!

(文責：森越京子)

支部だより

〈九州・沖縄支部〉

1. 支部大会、支部講演会、研究会等の開催

(1) 学術講演会

① 2015年度JACET九州・沖縄支部春季学術講演会

日時：7月11日(土)15:30～17:30

会場：西南学院大学

講演：Making It Real: Fiction, Film, and the Teaching of English Communication Skills

講師：Scott Pugh(福岡女子大)

② 2015年度秋学期学術講演会(予定)

日時：12月5日(土)13:00～14:30

会場：西南学院大学

講演：大学入試改革のWHYとHOW

講師：根岸雅史(東京外国語大)

(2) 研究会

① 第154回東アジア英語教育研究会

日時：6月20日(土)15:30～17:30

会場：西南学院大学

発題(1):「大学入試センター試験(外国語・英語)

に代わる業者試験の“Speaking Test”とは」

発表者：木下正義（元福岡国際大）

発題(2)：「『国際ビジネスプログラム』における英語教育とその効果について」

発表者：古村由美子（長崎大）

②第155回東アジア英語教育研究会・特別シンポジウム「言語研究とコーパスの接点」

日時：7月18日(土) 15:30～17:30

発題(1)：「日本人大学生は1分間にどれだけ英語を話せるか？国際比較調査から考える日本の英語教育の課題」

発表者：石川慎一郎（神戸大大学院）

発題(2)：「中日語彙交流の歴史を考える」

発表者：張莉（神戸大・院／北京外国語大学学生）

発題(3)：「英語句動詞の使用実態について」

発表者：前浜知味（神戸大・院）

発題(4)：「コーパスに基づく関係代名詞whichの機能と修得に関する質的研究—日本人英語学習者のWriting Fluencyを目指して—」

発表者：前村水奈子（長崎純心大・院・研究生）

③第156回東アジア英語教育研究会

日時：9月19日(土) 15:30～17:30

発題(1)：「C-Testの妥当性検証：古典的テスト理論によるアプローチ」

発表者：木屋みなみ（西南学院大・院）・伊藤彰浩（西南学院大）

発題(2)：「C-testの妥当性検証：規範的確率統計モデルによるアプローチ」

発表者：伊藤彰浩（西南学院大）・木屋みなみ（西南学院大・院）

④第157回東アジア英語教育研究会

日時：10月24日(土)15:30～17:30

会場：西南学院大学

発題(1)：「アウトプット活動とその効果：4技能融合型のタスクの可能性とは？」

発表者：柏木哲也（北九州市立大）

発題(2)：「乳幼児の言語発達における音声的特徴について」

発表者：山下友子（九州大）

⑤第158回東アジア英語教育研究会

日時：11月21日(土)15:30～17:30

発表者：清永克己（日新館中学校）

⑥第159回東アジア英語教育研究会(予定)

日時：12月12日(土)15:30～17:30

発表者：田地野彰（京都大）

⑦第160回東アジア英語教育研究会(予定)

日時：1月23日(土)

発表者：原隆幸（鹿児島大）、徳永美紀（福岡大）

⑧第161回東アジア英語教育研究会(予定)

日時：2月20日(土)

発表者：雪丸尚美（北九州市立大）、沖恵子（九産大[非]）

2. 支部総会・支部役員会等の開催

(1) 支部総会

日時：7月11日(土)14:00～15:00

会場：西南学院大学

議題：

1)2014年度活動報告について

2)2015年度活動計画について

(2) 支部役員会

①2015年度第3回役員会・第2回支部紀要編集委員会

日時：7月11日(土)11:00～14:00

会場：西南学院大学

議題：JACET第54回国際大会について、2015年度九州・沖縄支部紀要編集について、他

②2015年度第4回役員会

日時：10月17日(土)15:00～17:30

会場：西南学院大学

議題：JACET第54回国際大会について、新年度の活動について、他

③2015年度第3回支部紀要編集委員会

日時：10月31日(土)14:00～16:00

会場：西南学院大学

議題：2015年度九州・沖縄支部紀要編集について、他

④2015年度第5回役員会(予定)

日時：12月5日(土)11:00～12:00

会場：西南学院大学

議題：新年度の活動について

⑤2015年度第6回役員会(予定)

日時：2月20日(土)14:00～16:00

議題：新年度の活動について

(伊藤健一・北九州市立大学)

〈中国・四国支部〉

1. 支部研究会等の開催

(1) 支部秋季研究大会

日時：2015年10月24日(土) 13:00～17:35

場所：松山大学

研究発表

○第1室

1) "Assessing the English-language needs of medical professionals in Shikoku" Ian Willey (香川大)

2) 「OPP (Oral Presentation & Performance) イベントへの参加から得られた協働学習による教育効果—CLILの視点を取り入れた海上保安大学校の場合—」二五義博(海上保安大学校)

3) 「マンガ教材を用いた世界諸英語への理解を深める英語教育」馬場洗志(追手門学院大)

4) 「MoodleとYASUDA SYSTEMの融合によるeラーニング・システム」松岡博信(安田女子大)

5) 「英語の分節に関する一考察—閉鎖音/t/を音節境界の前後に持つ例を中心に—」小川直義(松山大)

6) 「日韓の中学校英語教科書における語彙およびリーダビリティ比較」李受娟(安田女子大)

○第2室

1) 「L1意識化促進とL2誤出力予防の相関性—「できた」の英語翻訳を事例として—」西谷工平(就実大)・中崎崇(就実大)・小田希望(就実大)

2) 「特別支援学級での外国語活動：評価に関する一考察」中山晃(愛媛大)

3) 「言語活動におけるワーキングメモリの働きについて—リスニングとリーディングに焦点を当てて—」藤村美希(安田女子大)

4) 「英語で教える英語の授業が学習者の教授言語の好みに与える影響」岩中貴裕(IPU環太平洋大)

5) 「小学校教員養成課程の2年生と3年生の英語活動に関する意識調査」田辺尚子(安田女子大)

6) 「英語指導力の高い小学校教員養成—短期集中講座における実践—」江原智子(環太平洋大)

○講演：

「動機づけ研究の観点から英語の学習指導を考える」廣森友人(明治大)

2. 支部総会・支部役員会等の開催

(1) 支部役員会

①第2回役員会

日時：2015年10月24日(土) 11:00～12:00

場所：松山大学

議題：

1) 2016年度事業計画(案)の検討

2) 2016年度会計予算(案)の検討

3) 2016年度人事(案)

4) その他：2015年度総務・財務合同委員会報告

3. その他

(1) OPP支部研究会(予定)

第7回Oral Presentation & Performance (OPP)

日時：12月13日(日)

場所：安田女子大学

(鳥越秀知・香川高等専門学校)

〈関西支部〉

1. 支部大会、支部講演会等の開催

(1) 支部大会

①支部春季大会

日時：2015年6月27日(土) 10:00～17:10

場所：大阪教育大学 天王寺キャンパス

シンポジウム1：

「海外研修プログラムを活用したグローバル人材育成の試み」講師：中田葉月(大阪教育大)、辻和成(武庫川女子大)

シンポジウム2：

「英語リーディング研究最前線：リーディングのしくみやリーディングの授業に関する最近の研究について」講師：川崎真理子(高崎経済大)、野呂忠司(愛知学院大)、中野陽子(関西学院大)

ワークショップ：

「教室で如何に効果的な多読指導を行うか」高瀬敦子(関西大[非])

②支部秋季大会+英語教育セミナー(予定)

日時：2015年11月28日(土) 9:00～17:40

場所：神戸学院大学 ポートアイランドキャンパス

シンポジウム：

「動機づけ研究最前線：実践との対話を目指して」講師：中田賀之(同志社大)、新田了(名古屋学院大)、竹内理(関西大)

指定討論者：小笠原良浩（兵庫県立姫路西高）

ワークショップ：

「学習者の意欲と動機を引き出す大学英語授業：ベストティーチャーに学ぶ授業運営」柏原郁子（大阪電気通信大）

コロキアム：

「大学英語教育における授業学：失敗を活用する」
講師：村上裕美（関西外国語大）、工藤泰三（名古屋学院大）、池田眞寸子（帝塚山大）、井上加寿子（関西国際大）

研究発表・実践報告：

1) 「日英語母語話者の事象描写比較と英語教育への示唆」吉田ひと美（関西学院大）、伊藤創（関西国際大）

2) 「用法基盤理論による小学校英語活動の実践研究」岡本真砂夫（姫路市立八幡小）、菅井三実（兵庫教育大）

3) 「協同学習が習熟度の低い学生に及ぼす影響」中野三紀（大阪大・院）

4) 「文法訳読法の新たな教育的応用：文法項目と学習方略の関係から」井上聡（環太平洋大）

5) 「音読練習と高速音読練習の大学生のTOEICリスニングスコアへの影響」下村冬彦（神戸女学院大）

6) 「日本人大学生はTOEICの学習に取り組む中でどのような経験をし、何を得たのか」香林綾子（甲南大）

7) 「内容言語統合学習（CLIL）における学習者の学力層別学習モチベーションの変化について」谷野圭亮（大阪教育大・院）

8) 「コーパスに基づく構文分析と授業へのその応用」長谷川順子（佛教大 [非]）

9) 「Pete Hamillの小説を題材にした大学リーディングテキスト」森永弘司（同志社大 [非]）

10) 「国際プロジェクトと英語教育の関連性：グループインタビュー調査結果」辻和成（武庫川女子大）、辻勢都（関西大 [非]）

11) 「日本語を母語とする英語学習者の音声語彙認識における母語音声の影響について」藤本恵子（神戸大・院）

12) “The Use of ‘I’ by Native English Speakers and Japanese English Learners in Academic writing” Megumi Okugiri（聖心女子大）

13) “Applying CLIL and Problem-based Learning Approaches to University English Classes” Martin

Parsons（阪南大）、Matthew Caldwell（阪南大）

14) “How to Integrate a Vision Board into an English Course” Mayumi Hamada（流通科学大）

第3回英語教育セミナー

目的：グローバル化を見据えた英語教育の先進的取り組みについて小中高大の英語教育関係者間で情報の共有をはかる

15:00～16:00

「コマーシャルプレゼンテーション」（教材会社他による賛助発表など）

16:05～17:35

シンポジウム：

「中高大グローバル教育最前線：SGH/SGU校の取り組み」

講師：岩見理華（神戸大附属中）、羽藤由美（京都工芸繊維大）、山中司（立命館大）

(2) 支部講演会

①第1回講演会

日時：2015年7月11日（土）15:30～17:00

場所：神戸大学 鶴甲第1キャンパス

講師：Jay Klaphake、J. D.（京都外国語大）、Angus McGregor（京都外大西高）、塩見佳代子（立命館大）

題目：TEDxKyotoで繋ぐコミュニティとTEDトークの革新的なアイデアを活用した英語授業

②第2回講演会

日時：2015年10月17日（土）

場所：同志社大学 今出川キャンパス

講師：大年順子（岡山大）、川西慧（京都大）、嶋林昭治（龍谷大）、山西博之（関西大）、山下美朋（関西大）

題目：指導者に使い勝手の良いライティング指導実践ハンドブック作成の取り組み

2. 支部総会・支部役員会等の開催

(1) 支部総会（予定）

日時：2015年11月28日（土）

場所：神戸学院大学 ポートアイランドキャンパス

(2) 支部役員会

①第1回役員会

日時：2015年7月11日（土）

場所：神戸大学 鶴甲第1キャンパス

②第2回役員会

日時：2015年10月17日(土)

場所：同志社大学 今出川キャンパス

(3) 支部ニューズレターの発行

1) JACET Kansai Newsletter No. 71

発行日：2015年5月16日

2) JACET Kansai Newsletter No. 72

発行日：2015年7月31日

3) JACET Kansai Newsletter No. 73

発行日：2015年11月1日(予定)

(吉村征洋・摂南大学)

〈中部支部〉

1. 支部大会、支部講演会、研究会等の開催

(1) 支部大会

日時：2015年6月20日(土) 10:00-17:00

場所：南山大学 名古屋キャンパス

大会テーマ：豊かなコミュニケーション力を育む
「ことば」の力

特別講演：

「行動派の回想と展望—東大グローバルコミュニケーション研究センター設立の裏側—」高田康成
(名古屋外国語大)

シンポジウム

テーマ：社会が求める英語力と大学で涵養する英語力のインターフェイス

1) 「Register/Style を意識した Usage-based Grammar for Advanced Learners」大森裕實(愛知県立大)

2) 「論理と感情」袖川裕美(プロ会議通訳者)

3) 「講義としての「翻訳」の勧め」池田年穂(慶應義塾大・名誉教授)

4) 「“Awareness”の三本柱—会話の文法、イディオム、および発話力—」豊田昌倫(京大・名誉教授)

研究発表

1) “Focusing on Oral and Grammar Skills for TOEIC®” Kayoko Nakagawa (Kanazawa Institute of Technology)、Marie Daito (Kanazawa Institute of Technology)、Seita Hayashi (Kanazawa Institute of Technology)

2) 「豊かなコミュニケーション力として活用できる基礎力とは何か—英語の幹「語順」「リズム」を学ぶ授業を—」山田昇司(朝日大)

3) “Student Response to Singing in Speaking Classes” Yukiko Yamami (Nagoya University of Foreign Studies(Part-time))

4) “Using Texts as Portholes for Topic Exploration” Mark Rebeck (Meijo University)

5) 「グループ活動を英語で行うための指導—実践報告と今後の課題—」加藤和美(東海大)

6) 「学習者の自伝(Learner’s autobiography)に対する分析—ヴィゴツキーの概念発達の観点から—」森明智(東京理科大)

(2) 秋季定例研究会

日時：2015年10月24日(土)(予定)

場所：中部大学 鶴舞キャンパス

講演

「パフォーマンス心理学：遊びと模倣に基づく新しい発達の考え方」茂呂雄二(筑波大大学院)

研究発表

1) 「外国語読解と不安の関係に関する探索的研究」三上仁志(中部大)、梁志鋭(東京女学館大)、吉川りさ(名古屋大・院)

2) 「日本人大学生英語学習者におけるスペリング力と英文読解力の関係：産出課題タスクを焦点に」吉川りさ(名古屋大・院)、梁志鋭(東京女学館大)

3) “Building Confidence and Communicative Competence” Fern Sakamoto (Aichi Prefectural University)

研究会発表(ライティング研究会)

「沖縄の米軍基地移転問題をめぐる政治的発言のレトリック的分析」木村友保(名古屋外国語大)

2. 支部総会・支部役員会等の開催

(1) 支部総会

① 第1回

日時：2015年6月20日(土)

場所：南山大学 名古屋キャンパス

議題：

1) 2015年度理事会報告

2) 2014年度中部支部事業報告

3) 2014年度中部支部会計収支報告

4) 2015年度人事について

5) 2015年度中部支部事業計画について

6) 2015年度中部支部予算について

② 第2回 (予定)

日時: 12月12日 (土)

場所: 愛知大学 名古屋校

(2) 支部役員会

① 2015年度第3回役員会

日時: 2015年6月20日 (土)

場所: 南山大学

議題:

1) 本部報告

2) 会計報告 (2015.6.19現在)

3) 2015年度第1回中部支部総会資料について

4) その他

② 2015年度4回役員会

日時: 2015年7月25日 (土)

場所: 南山大学

議題:

1) 本部報告

2) 事務局報告

3) 会計報告 (2015.7.25現在)

4) 支部講演会の会場変更について

5) 秋季定例研究会について

6) 中部支部MLの運用方針について

7) その他

③ 2015年度第5回役員会

日時: 2015年10月24日 (土)

場所: 中部大学 名古屋キャンパス

議題:

1) 本部報告

2) 事務局報告

3) 会計報告 (2015.10.5現在)

4) 支部講演会について

5) Newsletter No.35について

④ 2015年度第6回役員会 (予定)

日時: 2015年11月14日 (土)

場所: 南山大学

⑤ 2015年度第7回役員会 (予定)

日時: 2015年12月12日 (土)

場所: 愛知大学 名古屋校

⑥ 2015年度第8回役員会 (予定)

日時: 2015年1月9日 (土)

場所: 南山大学

⑦ 2015年度第9回役員会 (予定)

日時: 2015年2月20日 (土)

場所: 名城大学 天白キャンパス

3. その他

(1) 支部紀要の発行

『中部支部紀要』13号

発行日: 12月20日 (予定)

(2) 支部ニューズレターの発行

JACET-Chubu Newsletter 35号

発行日: 12月20日 (予定)

(村田泰美・名城大学)

〈関東支部〉

1. 支部大会、支部講演会、研究会等の開催

(1) 支部大会

日時: 2015年7月12日 (日) 9:30 ~ 17:35

場所: 青山学院大学 青山キャンパス

大会テーマ: 統合型英語教育における異文化間多
様性

Intercultural Diversity of Integrated
Learning in English Education

基調講演:

「字幕の後ろに見えるもの」戸田奈津子 (映画字幕翻訳者)

招待講演

「グローバル化時代の英語教育—異文化間コミュニケーション能力育成の意義と課題」中山夏恵 (共愛学園前橋国際大)、栗原文子 (中央大)

全体シンポジウム

「統合型英語教育における異文化間多様性」笹島茂 (東洋英和女学院大)、塩澤正 (中部大)、森住衛 (大阪大・桜美林大・名誉教授)

研究発表17件、実践報告9件、賛助会員発表3件

(2) 月例研究会

① 第2回月例研究会

日時: 2015年6月13日 (土) 16:00 ~ 17:20

場所: 青山学院大学 青山キャンパス

題目: 「CLILの理論と実践—フィンランド海外教育実習をとおして—」 柏木賀津子 (大阪教育大)

②第3回月例研究会

日時：2015年11月14日（土）16:00～17:20

場所：青山学院大学 青山キャンパス

題目：「夜間定時制高校生にとっての英語学習の意味：事例研究を通じた検討の試み」田中祥子（東京大・院）

(3) 講演会（青山学院大学英語教育研究センター・JACET 関東支部共催）

① 2015年度第2回講演会

日時：2015年9月12日（土）16:00～17:30

場所：青山学院大学 青山キャンパス

題目：「教育にICTを使う意味」杉本卓（青山学院大）

② 2015年度第3回講演会

日時：2015年10月10日（土）16:00～17:30

場所：青山学院大学 青山キャンパス

題目：「再考：英語教育を通して育てたい学ぶ力とは何か？」清水公男（文京学院大）

③ 2015年度第4回講演会（予定）

日時：2015年12月12日（土）16:00～17:30

場所：青山学院大学 青山キャンパス

題目：「CLILと協調学習の現状と課題」山崎勝（埼玉県立和光国際高等学校）

※月例研究会・講演会の詳細は、支部会員MLにて配信及び関東支部HP上に掲載されます。

2. 支部総会・支部役員会等の開催

(1) 支部総会

第1回支部総会

日時：2015年7月12日（日）

場所：青山学院大学 青山キャンパス

議題：2014年度事業報告・会計報告、2015年度事業計画

第2回支部総会

日時：2015年11月14日（土）

場所：青山学院大学 青山キャンパス

議題：2016年度支部事業計画・予算について

(2) 支部役員会

① 第4回支部運営会議

日時：2015年9月12日（土）14:00～15:30

場所：青山学院大学 青山キャンパス

議題：

1) 新規研究企画委員について

2) 第9回支部大会HP掲載用写真について

3) 第2回支部総会の日程について

② 第5回支部運営会議

日時：2015年10月10日（土）14:30～15:30

場所：青山学院大学 青山キャンパス

議題：

1) JACET通信の新企画について

2) 支部大会について

⑤ 2015年度支部運営会議（予定）

第6回 11月14日（土）14:10～15:10（場所：青山学院大学）

第7回 12月12日（土）14:30～15:30（場所：青山学院大学）

第8回 1月9日（土）14:30～15:30（場所：青山学院大学）

3. その他

(1) 支部ニューズレターの発行

『JACET 関東支部ニューズレター』第5号

発行日：2015年9月30日

（高木亜希子・青山学院大学）

〈東北支部〉

1. 支部大会、支部講演会、研究会等の開催

(1) 支部大会

日時：2015年7月4日（土）13:40～17:00

場所：仙台市情報・産業プラザ

特別・記念講演：

1) “Bridging the gap between academia and the real world” 野口ジュディー・津多江（神戸学院大）
研究発表：

1) 「CAN-DO リスト普及の現状とその改善について」金子淳（山形大）

(2) 支部例会（予定）

日時：2015年11月29日（日）13:30～16:00

場所：仙台市情報・産業プラザ

特別・記念講演：

1) 「ダイナミック・システム・アプローチからみたスピーチプロダクションの発達」尾関直子（明治大）

研究発表：

1) 「教育実習における英語教員志望生の専門的成長—協働による学びと実践を通して—」小嶋英夫(文教大)

2. 支部総会・支部役員会等の開催

(1) 支部総会

①支部総会

日時：2015年7月4日(土) 13:00～13:30

場所：仙台市情報・産業プラザ

議題：

- 1) 2014年度事業・活動報告、支部会計報告
- 2) 2015年度事業・活動計画、人事案等

②支部臨時総会(予定)

日時：2015年11月29日(日) 13:00～13:20

場所：仙台市情報・産業プラザ

議題：

- 1) 2018年度国際大会の開催について

(2) 支部役員会

①第2回役員会

日時：2015年7月4日(土) 12:00～12:50

場所：仙台市情報・産業プラザ

議題：

- 1) 支部例会の内容について
- 2) 2018年度国際大会の開催について
- 3) 支部紀要の発行および編集について
- 4) 支部ニューズレターの発行について

②第3回役員会

日時：2015年10月18日(日) 12:00～14:30

場所：ホテルメトロポリタン仙台

議題：

- 1) 2016年度活動計画・人事案(支部の運営、事業・活動計画等)について
- 2) 2018年度国際大会の開催について

③第4回役員会(予定)

日時：2015年11月29日(日) 12:00～13:00

場所：仙台市情報・産業プラザ

議題：

- 1) 2016年度活動計画・人事案(支部の運営、事業・活動計画等)について
- 2) 2018年度国際大会の開催について

3. その他

(1) 支部紀要の発行

『TOHOKU TEFL (JACET 東北支部紀要)』Vol. 6

発行日：2016年3月31日発行(予定)

(2) 支部ニューズレターの発行

1) 『JACET 東北支部通信 (JACET Tohoku Newsletter)』No. 41

発行日：2015年3月31日

2) 『JACET 東北支部通信 (JACET Tohoku Newsletter)』No. 42

発行日：2016年3月31日(予定)

(岡崎久美子・仙台高等専門学校)

〈北海道支部〉

1. 支部大会、支部講演会、研究会等の開催

(1) 2015年度支部大会(第29回)大会

日時：2015年7月4日(土) 13:00～17:40

場所：ニセコ町民センター

研究発表：

- 1) 「地域の企業や関係機関と連携したグローバル人材育成に向けた取組」白鳥金吾(北星学園大)、青山智恵(ケンブリッジ大学英語検定機構)
- 2) 「英語習熟度の低い大学生が描く英語教師像—教師の自己省察の一助として—」牧野真貴(近畿大)

基調講演：

「CLIL/CBLTが育む英語教師のこころの変化」笹島茂(東洋英和女学院大)

講演：

“Niseko, English and Social Mobility” Julian Bailey (SMiLE Niseko Language School/Hokkaido Exam Centre affiliated by Cambridge English Language Assessment)

シンポジウム：

「言語教師認知研究と英語教育」

笹島茂(東洋英和女学院大)、河合靖(北海道大)、志村昭暢(北海道教育大)

(2) 研究会

① 2015年度第2回支部研究会

日時：2015年10月17日(土) 13:00～15:00

場所：北海道武蔵女子短期大学

研究発表：

1) “Blending Technology and TBLT: The Otaru University of Commerce Blended Learning Project” John Thurman(Otaru University of Commerce)

2) 「英文読解方略、動機づけ、学習観の社会文脈的考察：生態学的アプローチの枠組みから」松本広幸（北海学園大）

3) 「JACET北海道支部CCR研究会の歴史」志村昭暢（北海道教育大）、横山吉樹（北海道教育大）、河合靖（北海道大）、酒井優子（北海道札幌国際情報高校）、片桐徳昭（北海道教育大）

2. 支部総会・支部役員会等の開催

(1) 2015年度支部総会

日時：2015年7月4日（土）12:30～12:50

場所：ニセコ町民センター

議題：

- 1) 2014年度事業報告
- 2) 2015年度事業計画
- 3) 2015年度人事
- 4) 各種委員会報告
- 5) 2016年度事業計画案
- 6) 2016年度人事案

(2) 2015年度支部役員会

① 第2回役員会

日時：7月11日（土）14:00～16:00

場所：北星学園大学

② 第55回国際大会第4回実行委員会

日時：10月17日（土）15:00～17:30

場所：北海道武蔵女子短期大学

3. その他

(1) 2015年度支部ニューズレターの発行

『JACET北海道支部ニューズレター』29号

発行日：2016年3月31日（インターネット上で公開予定）

（目時光紀・天使大学）

編集後記

本号にご執筆いただいたすべての先生方に、まずはお礼を申し上げます。

特別寄稿は2本いただくことができました。1本は『JACET通信』創刊号の編集長である田中春美先生によるものです。本通信の誕生やJACET初期について教えていただいた後に創刊号を再度手に取って読んでみると、歴史の重みを感じます。JACETの大先輩の先生方に心から感謝いたします。

もう1本は北星学園大学の森越京子先生と吉田かよ子先生によるものです。学生の成長がよく分かる教育実践報告です。来年の国際大会は北星学園大学で開催されますので、そこで星のように輝く(Shine like stars)学生たちに出会えるのを楽しみにしたいと思います。（水島）

編集：『JACET通信』委員会

理事 佐野富士子・横浜国立大学

委員長 水島孝司・南九州短期大学

副委員長 田口悦男・大東文化大学

遠藤雪枝・清泉女子大学

Hamilton, Robert・明治大学

伊藤健一・北九州市立大学

Lieb, Maggie・明治大学

目時光紀・天使大学

村田泰美・名城大学

岡崎久美子・仙台高等専門学校

鳥越秀知・香川高等専門学校

吉村征洋・摂南大学

2015年12月1日発行

発行者 一般社団法人 大学英語教育学会 (JACET)

代表者 寺内 一

発行所 〒162-0831 東京都新宿区横寺町55

電話 (03) 3268-9686

FAX (03) 3268-9695

<http://www.jacet.org/>

印刷所 〒252-0021 座間市緑ヶ丘3-46-12

有限会社 タナカ企画

電話 (046) 251-5775